



追手門学院大学

# 成熟社会研究所 紀要

Center for Mature Society Research

第 3 号

2019.3





# 追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要

## 第3号 目次

### 論文

信頼と論理的思考, および抽象的思考に関する試論 ..... 神吉 直人 1

### 研究ノート

大学生の論理的思考力育成の可能性についての考察 ..... 佐藤友美子 9

### プロジェクトレポート

プロジェクト科目における学生自主企画講座の実施  
——授業プログラムおよび講座レポートによる報告——  
..... 中川 啓子・佐藤友美子・村上 亨 19

参加型研究会シェアラボ「私の仕事」シリーズを振り返る  
——シェアラボ第4期・第5期講演録より—— ..... 中川 啓子 35

### 活動報告

2018年度の活動記録 ..... 47



## 論文

## 信頼と論理的思考、および抽象的思考に関する試論

神 吉 直 人

## I. はじめに

2014年に設立された追手門学院大学成熟社会研究所では、2015年11月から2017年3月まで、「信頼の現場」という産学連携プロジェクトを実施した。これは、これからの社会と市民のための新しいシステムを信頼をキーワードに解き明かし、社会に発信することを意図したものであった。また、2018年度からは、自立して生きるために社会で通用する企画力、交渉力、運営力といったスキルを身につけることを目的として、学生を対象とした論理的思考に関するツールの開発を行っている（中川・佐藤、2018；19年度中にはリーフレットを発行予定）。

本稿は、後に続く研究のための試論として、これから2つの活動の鍵概念である信頼（trust）と論理的思考（logical thinking）、および抽象的思考（abstract thinking）について簡単な統計分析を行い、関連性を検討する。本稿の構成は次の通りである。続く第2節では、既存研究を基に対象とする概念について整理し、仮説を導出する。第3節では、概念を操作化する質問項目について述べる。そして、第4節で統計分析の概要と結果を示し、考察を行う。

## II. 理論の検討と仮説

## 2-1. 信頼

信頼は、「相手の内面にある人間性や自分に対する感情などの判断にもとづいてなされる、相手の意図についての期待」（山岸、1998）、「信頼対象が自らにとって肯定的な役割を遂行する能力と意図に対する期待」（真鍋・延岡、2003）などのように、既存研究では相手に対する期待と定義されてきた。また、Putnam（1993）が社会関係資本を「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を改善でき

る、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」と定義する中に含んだように、他の概念を構成する要素として用いられることもある。

このうち、真鍋・延岡（2003）の定義にある能力に対する期待は、相手が役割の遂行に必要な能力を有していることを、過去の実績や評判などから、合理的に判断するものである。一方、意図に対する期待は、取引などの付き合いの中で相手が機会主義的な行動をとらないことへの期待である。社会的取引は、通常、不完備契約であり、相手の機会主義的行動を抑制するにはモニタリングコストなどの取引費用がかかる。相互の信頼関係は、「この人は私を信頼してくれているのだから、私もこの人を裏切ってはならない」といった形で機会主義的行動を抑制するため、取引費用を下げることに寄与する。

経営学における信頼に関する研究は、概ね3つの分析水準で行われてきた（神吉、2017）。従業員同士や、営業担当者と顧客の間などに育まれる信頼を対象とする個人間レベル、従業員と企業や、消費者（顧客）と企業の関係などに関する個人-企業レベル、そして、系列などの取引関係に代表される企業間（組織間）レベルの3つである。本稿では、2つ目の個人-企業レベルの信頼を想定している。また、信頼には方向性がある。つまり、主体が同僚や所属する組織に対して信頼を抱くことと、逆に同僚や組織から信頼されることは異なる現象である。本稿では、前者について検討する。

## 2-2. 論理的思考と抽象的思考

近年、論理的思考は、就職に際して有利となったり、採用後に求められたりするスキルとして、斡旋企業が運営する媒体などにも登場するようになった<sup>1)</sup>。論理的思考に長けた者は、そうでない者に比して人前でのプレゼンテーションや商談をスムーズに行ったり、企画書などを上手くまとめたりすることができる

とされる(北村, 2018)。さらに、小学校の段階で論理的思考を育成することが検討されるなど、政策レベルでも議論されている<sup>2)</sup>。

辞書によれば、論理的とは「論理にかなっているさま。きちんと道筋を立てて考えるさま」を意味する(デジタル大辞泉; 小学館)。同じく、論理は「考えや議論などを進めていく道筋。思考や論証の組み立て」であり、「事物の間にある法則的な連関」である。また、石原(2007)は論理を、現実を解明し、説明するための道具としている。平明に述べれば、「なぜそうなのか」「どうしてこうなったのか」を始めから終わりまで、わかるように順を追って考えることが、論理的思考といえる。

仕事の場面にあてはめれば、各人が組織における役割遂行に際して直面する諸問題に関して、複雑な事情や条件を整理・分析し、結論までの道筋をわかりやすく示すといった過程の全体、ないしその一部に関する概念とまとめることができる。論理的思考の力は、問題解決に関わる一連の流れの巧拙に関わる能力であり、経営におけるコミュニケーションの要諦となる能力でもある。さらに文脈によっては、その解決されるべき問題自体を自ら定義することも求められる(関西大学初等部, 2012)<sup>3)</sup>。

この今日的な意味での論理的思考は、企業経営にとって重要なものとして注目されているが、これを直接に扱った研究は、本邦の経営学においてはみられない。CiNiiのフリーワードを「論理的思考」とし、刊行物名に経営組織論、および経営行動論の国内主要ジャーナルである『組織科学』、『日本経営学会誌』、『経営行動科学』の3誌のいずれかを入れて検索しても、1本の論文も見つからない(2019年2月25日時点)。フリーワードを「論理的」としても、3誌を合わせて鷺田(2016)が該当するのみである。フリーワードを「論理的思考」とし、刊行物名を「経営」とすると、13件の結果が得られるが、そのうち「本文あり」に該当するのは4件であり、経営学に関するものは赤川(2009)しかない。その赤川(2009)も、論理学を経営に応用する上で考慮すべき問題点について議論しており、本節の最初に述べたような、今日求められる功利的なスキルとしての論理的思考を対象としたものではない<sup>4)</sup>。

論理的思考は、批判的思考(critical thinking)を構成する要素の一つとも考えられている(平山・楠見, 2004)。批判的思考は、ものごとを客観的に捉え、多角的・多面的に検討し、適切な基準に基づいて判断す

る際に必要となる思考であり、「自分の推論過程を意識的に吟味する反省的な思考であり、何を信じ、主張し、行動するか決定に焦点を当てる思考」と定義される(Ennis, 1987; 平山・楠見, 2004)。これも、組織における問題を発見し、それに対する解決策を見いだすこと、およびその結論に至る過程を他者に伝えて組織的対応に取り組むことに関わる思考である。

そして、抽象的思考も論理的思考と類似の文脈で語られている。抽象的とは「いくつかの事物に共通なものを抜き出して、それを一般化して考えるさま」(デジタル大辞泉; 小学館)、「概念的で一般的なさま」(大辞林 第三版)である<sup>5)</sup>。また、「頭の中だけで考えていて、具体性に欠けるさま」というネガティブなニュアンスを含む語義もある(デジタル大辞泉; 小学館)。いずれにしても、具体(性)や明解、明確なことから離れて思案する、形而上的な働きを指している。

小説家の森博嗣によれば、抽象的に考えることは、客観的に考えることと似ており、自分の立場ではない、もっと高い視点からものごとの本質について考えることである。抽象する際には、事物に関する大部分の具体的な情報が捨象される。そのことで、別の多数のものにも共通する、一般的な概念が構築される。つまり、抽象化することによって、問題を全体的に捉えることができ、まったく別のいろいろなものに当てはめることも可能になる(森, 2013)。

このような思考の重要性を、伊丹・西野(2004)は経営学におけるケース学習の観点から述べている。彼らによれば、意義深いケース学習とは、多くのケースをストックとして記憶することではない。そうではなく、ケースに書かれた現象をきっかけとして、経営のあり方やメカニズム、論理について深く考えることがケース学習の本義である。ケースの分析を通じて探し出された論理が普遍的であればあるほど、いろいろな状況に応用できる(伊丹・西野, 2004)。また、楠見(2014)による適応的熟達化の議論の中で、中堅者は文脈を越えた類似的認識(類推)ができるようになり、類似的な状況において、過去の経験や獲得したスキルを使えるようになるとされるのも、同様の考え方である。

このように、抽象的な思考においては、目の前の具体的な事物(形式知)からいったん離れることが要求される。そのため、暗黙的なものや曖昧なものに対する姿勢や態度・志向性が、抽象的思考の巧拙に影響すると考えられる。換言すれば、暗黙的なものの受容性や見えないものへの感受性の高さが、具体性を捨象

し、手掛かりを手放すような、不案内な思考の継続に関わる。哲学者の鷺田清一は、困難な問題に直面したときに、すぐに結論を出さないで、問題が自分の中で立体的に見えてくるまでいわば潜水し続けることが大事であるとし、それを“知性に肺活量をつける”と形容している。そして、哲学を知性の肺活量を鍛える術と位置付けている（鷺田，2014）。

仕事においては、例えば、一筋縄ではいかないような課題を前にして、答えがでない状況のまま、時には数週間から数ヶ月の長期間に渡る思案が必要となることがある。そのような事態に対峙する際には、具体的に明確な答えをすぐに求めるのではなく、課題の状況を俯瞰し、全体を捉えるような態度が望ましい。時には遠回りに、より一般的な解を求める方が、かえって近道になりうる。そのためには、解決や判断を保留したままでもらえること、答えが得られないことを苦とせず、その状況を楽しむことができるような、哲学的な思考に親しんでいる方が良いかもしれない。

また、身体性、身体感覚、あるいは身体的感度といった言葉で表現される事柄も容易に答えが得られないような思考に関連する。例えば、倫理や道德に関する問題には、唯一の正解が存在しない。武道家で思想家の内田樹は、どうふるまっていれば正否の基準がないような「無規範状態を生き延びるための暫定的な規範」を持っているかどうかを人間的成熟の指標としている（内田，2011）。法律などのように明文化された規範は、自身の外から与えられる、いわば外的なルールである。一方、倫理や道德といった内的ルールは、自ら主体的に考え抜くことで獲得される（神吉，2018）。内田（2004）は、橋本治の言説をはじめ多くの例を挙げて、倫理に関する困難な判断において身体からのメッセージを聴くことの重要性を説いている。また、石原（2007）は論理的に考えたことが感覚と一致し、論理が自分のものとなったと実感するまでの過程を論理の感覚化と呼んでいる。このように抽象的思考に対して、身体性は密接な関わりがある。

さらに、人の好みや価値観の正しさも決して一義的には決定できるものではない。組織開発の領域でも、同僚の価値観や考え方が対立する場合、一方を優先して他方を無視するのではなく、それらの同時最適解を探ることが大切だと考えられている（中村，2015）。以上のような場面で「考え抜く」際に必要となるのは、論理的思考であり、抽象的思考にはかならない。

## 2-3. 仮説

本稿は、信頼と論理的思考、および抽象的思考について統計分析を行い、関連性を検討することを意図している。ここでは、それらの関係性に関して、簡単な作業仮説を設定する。

前述のように、本稿では、分析水準としては個人－企業レベルの、主体（従業員）が所属組織に対して抱く信頼を対象としている。信頼は相手の能力や意図に対する期待であり、そこでは、相手との関係性に関して合理的な判断が働く<sup>6)</sup>。信頼が合理的判断の産物であるとすれば、論理的思考に長け、より合理的に思考することができる者の方が、自らの所属組織に対して信頼を抱く傾向があると考えられる。

仮説1：論理的思考への態度は、所属組織への信頼に正の影響を与える。

信頼は具体的なものではなく、実際に目にすることはできない。よって、暗黙的なものをより多く受容するなど、抽象的な思考に対する耐性が高い者の方が、そうでない者よりも目には見えない信頼の存在を認められると考えられる。

仮説2：抽象的思考への態度は、所属組織への信頼に正の影響を与える。

## Ⅲ. 調査方法

### 3-1. 調査対象

上記の仮説を検証するため、質問票による量的調査を実施した。株式会社マクロミルのモニターを利用し、製造業のうちAV・家電・電気機械器具・コンピュータに携わる人々から515のサンプルを得た（回答期間2017年12月21日～26日）。性別は男性が488人（94.8%）、女性が27人（5.2%）、平均年齢は48.35歳（最大値65、最小値26）であった。職種は「研究／開発」が207人（40.2%）、「生産／製造」122人、「営業／営業企画」55人、「生産技術・計画」54人、「ソフト開発・設計」24人、「SE／プログラマー」20人、「企画」17人、その他が16人であった。そして、雇用形態は正社員481人（93.4%）、契約社員17人、派遣社員13人、その他4人となっている。

### 3-2. 測定尺度

信頼に関しては、服部（2008）を参考に、所属組織

に対する信頼を2つの項目で測定した。まず、直接的に「自分の会社を信頼して仕事をしている」かどうかを問うた。そして、間接的な項目として「同僚の多くは会社のことを信頼している」を設定した。「人は他者の欲望を欲望する」と言われるように、人は他者の考えを通して、自らの思考を構築する。また、人は自らの思考を投影させて他者の思考について推測することもある。自らの所属組織に対する信頼についても、同僚の意見を参考にしてそれを構築したり、自分の意見を同僚に代弁させるようにして認識したりしていることが考えられる。なお、この2項目は、鈴木(2013)の1対1の信頼と、社会や集団内の広範な信頼という分類のうち、前者の立場によっている<sup>7)</sup>。

論理的思考については、平山・楠見(2004)の批判的思考態度尺度から「論理的思考への自覚」を用いた。これは、「複雑な問題について順序立てて考えることが得意だ」、「考えをまとめることが得意だ」、「物事を正確に考えることに自信がある」、「誰もが納得するような説明をすることができる」、「何か複雑な問題を考えると混乱してしまう(反転項目)」、「公平な見方をするので、私は仲間から判断を任される」、「何かの問題に取り組む時は、しっかりと集中することができる」、「一筋縄ではいかないような難しい問題に対しても取り組み続けることができる」、「道筋を立てて物事を考える」、「私の欠点は気が散りやすいことだ(反転項目)」、「物事を考えるとき、他の案について考える余裕がない(反転項目)」、「注意深く物事を調べることができる」、「建設的な提案をすることができる」の13項目から成る。

抽象的思考に関しては、見えないものへの感受性や暗黙的なものへの受容性、矛盾や曖昧さに対する耐性といった観点から、次の9つの項目を独自に設定した。「仕事を円滑に進めるためには、目に見えないものや、言葉にできないものも大切にすべきだと思う」、「仕事において、目に見えない感覚や言葉にできない感覚を大切にするように心がけている」、「仕事において、周りの人と呼吸を合わせるなど、身体的感度を高めるようにしている」、「身体感覚を大切にすることで、仕事が円滑に進むことがある」、「仕事を円滑に進めるために、阿吽の呼吸のような、言葉にならない事柄も大切にしている」、「同僚の価値観や考え方が対立する場合、一方を優先して他方を無視するのではなく、それらの同時最適解を探るようにしている」、「仕事においては、白黒ははっきりできないようなところこそ、大切なことがあると思う」、「どうふるまうべき

かについて正否の基準がないときにも、自ら考えて行動するように心がけている」、「一見矛盾しているように見える問題の中から、解決の糸口を見つけることは得意な方だ」の9つである。

以上の全24項目をランダムに並び替え、質問票を作成した。それぞれの質問項目に対し、「1. あてはまる」から「4. あてはまらない」までの4点尺度で回答を求めた。

## IV. 分析結果

### 4-1. 因子分析

上記の24項目に対する回答を用いて、IBM SPSS Statistics24による因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った。抽象的思考に関する独自の質問項目のうち、回転後の共通性が低かった2項目を除いて再計算したところ、表1のような結果が得られた<sup>8)</sup>。

分析の結果、4つの因子が抽出された。第1因子は、平山・楠見(2004)の「論理的思考への自覚」13項目のうちポジティブな10項目から成るため、「論理的思考への自信」とする( $\alpha = .894$ )。第2因子は、「抽象的思考への態度」である( $\alpha = .761$ )。第3因子は、平山・楠見(2004)の13項目のうちの残り3項目(いずれも反転項目)がまとまった。第1因子に対して、「論理的思考への不安」とする( $\alpha = .683$ )。第4因子は、「信頼」である( $\alpha = .690$ )。それぞれの因子ごとに質問項目に対する回答の平均値を算出し、続く分析に用いる。

### 4-2. 差の検定

次いで、論理的思考、および抽象的思考への態度に関して、所属組織への信頼の差を確認するため、対応のないt検定を行った(表2)。4-1で得た論理的思考への自信、抽象的思考への態度、論理的思考への不安の各因子について、平均値の平均を求め、その値に基づいてそれぞれ有と無の2群にわけている(平均値: 論理的思考への自信=2.06、抽象的思考への態度=2.05、論理的思考への不安=2.25)。4行目の「論理的思考+抽象的思考」は、論理的思考への自信と抽象的思考への態度がいずれも有の者だけを有とし、どちらか片方ないし両方が無の者を無として群にわけている。質問票では、「1. あてはまる」から「4. あてはまらない」までの4点尺度で回答を求めているため、平均値が小さい方がより信頼が高いことを意味している。

表 1：因子分析（主因子法・バリマックス回転）

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	共通性
複雑な問題について順序立てて考えることが得意だ	<b>0.751</b>	0.128	0.143	0.110	0.613
物事を正確に考えることに自信がある	<b>0.699</b>	0.186	0.209	0.036	0.568
考えをまとめることが得意だ	<b>0.685</b>	0.097	0.199	0.120	0.532
注意深く物事を調べることができる	<b>0.650</b>	0.160	0.101	-0.008	0.458
道筋を立てて物事を考える	<b>0.632</b>	0.100	0.153	0.057	0.436
建設的な提案をすることができる	<b>0.628</b>	0.220	0.162	0.146	0.490
一筋縄ではいかないような難しい問題に対しても取り組み続けることができる	<b>0.614</b>	0.248	0.193	0.085	0.483
何かの問題に取り組む時は、しっかりと集中することができる	<b>0.595</b>	0.215	0.181	0.043	0.435
誰もが納得するような説明をすることができる	<b>0.523</b>	0.137	0.190	0.151	0.351
公平な見方をするので、私は仲間から判断を任せられる	<b>0.472</b>	0.348	0.109	0.212	0.400
仕事を円滑に進めるためには、目に見えないものや、言葉にできないものも大切にすべきだと思う	0.130	<b>0.670</b>	0.001	0.007	0.465
仕事を円滑に進めるために、阿吽の呼吸のような、言葉にならない事柄も大切にしている	0.201	<b>0.606</b>	0.098	0.027	0.418
仕事において、目に見えない感覚や言葉にできない感覚を大切にするように心がけている	0.164	<b>0.604</b>	-0.001	-0.113	0.405
身体感覚を大切にすることで、仕事が円滑に進むことがある	0.094	<b>0.584</b>	-0.129	0.027	0.367
仕事において、周りの人と呼吸を合わせるなど、身体的感度を高めるようにしている	0.117	<b>0.463</b>	0.082	0.167	0.262
仕事においては、白黒はっきりできないようなところにこそ、大切なことがあると思う	0.085	<b>0.443</b>	0.001	0.080	0.210
同僚の価値観等が対立する場合、一方を優先して他方を、それらの同時最適解を探るようにしている	0.319	<b>0.403</b>	0.222	0.118	0.328
何か複雑な問題を考えると混乱してしまう	0.358	-0.022	<b>0.625</b>	0.045	0.521
私の欠点は気が散りやすいことだ	0.203	-0.026	<b>0.580</b>	0.080	0.385
物事を考えるとき、他の案について考える余裕がない	0.270	0.062	<b>0.559</b>	-0.035	0.390
自分の会社を信頼して仕事をしている	0.116	0.145	0.078	<b>0.792</b>	0.668
同僚の多くは会社のことを信頼している	0.161	0.016	0.001	<b>0.625</b>	0.417
クロンバック $\alpha$	0.894	0.761	0.683	0.690	
因子寄与	4.462	2.513	1.408	1.220	
累積寄与率	20.281	31.702	38.104	43.648	

5 回の反復で回転が収束

表 2：t 検定（所属組織への信頼の差）

	度数	平均値	標準偏差	平均値の標準偏差	平均値の差	有意確率
論理的思考への自信	有	249	2.223	0.710	-0.313	0.000
	無	266	2.536	0.650		
抽象的思考への態度	有	272	2.270	0.712	-0.242	0.000
	無	243	2.512	0.657		
論理的思考への不安	無	249	2.265	0.706	-0.231	0.000
	有	266	2.496	0.670		
論理的思考 + 抽象的思考	有	163	2.153	0.701	-0.338	0.000
	無	352	2.491	0.669		

すべて等分散を仮定 N=515

t 検定の結果、いずれの因子についても有意差がみられ、思考に対してポジティブな態度を持っている者の方が、所属組織を信頼している傾向があることが示された。

#### 4-3. パス解析

そして、因子分析で得られた因子のうち、論理的思考への自信、抽象的思考への態度、論理的思考への不安の 3 因子を説明変数、信頼を被説明変数とし、Amos.23 によるパス解析を行った。修正指数に沿って、「公平な見方をするので、私は仲間から判断を任

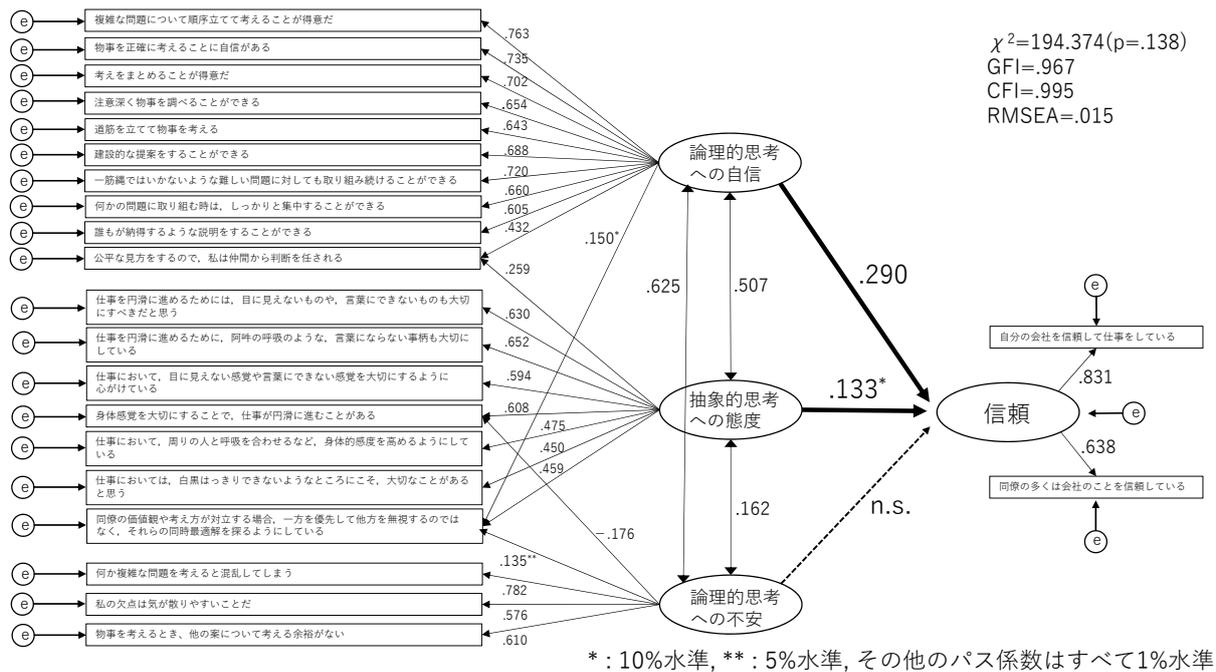


図1: パス図

される（論理的思考への自信）」に抽象的思考への態度からのパスを、「身体感覚を大切にすることで、仕事が円滑に進むことがある（抽象的思考への態度）」に論理的思考への不安からのパスを、「同僚の価値観等が対立する場合、一方を優先して他方を～、それらの同時最適解を探るようにしている（抽象的思考への態度）」に論理的思考への自信と不安の双方からのパスをそれぞれ引いた。また、観測変数の誤差相関を設定することで、適合モデルを得た ( $\chi^2=194.374$  ( $p=.138$ ); GFI=.967, CFI=.995, RMSEA=.015)。その結果を図1に示す（図に誤差相関は示していない）。

図1に示されたように、論理的思考への自信から信頼へのパスの係数は.290（1%水準で有意）であったが、抽象的思考への態度から信頼へは.133（10%水準で有意）、論理的思考への不安から信頼へのパスは非有意であった。

#### 4.4. 考察

t検定、およびパス解析の結果から、仮説1「論理的思考への態度は、信頼に正の影響を与える」は支持された。複雑な問題について、道筋を立てて考えることができることに関する自己評価が、自らが所属する組織への信頼につながっている。自身の論理的思考能力への自信は、仕事においてある程度の成果を残すことができる／できているという自負の表れと考えられ

る。そのような仕事への前向きな気持ちが、所属組織に対する期待につながっているのかもしれない。

一方、仮説2「抽象的思考は、信頼に正の影響を与える」は支持されたとはいいがたい。t検定では、抽象的思考への態度がある者の方が、ない者と比べて所属組織への信頼が高かったが、パス解析の結果は10%の有意水準にとどまった。所属組織への信頼のように実際に目にすることはできないものは、抽象的な思考に対する耐性の高さの影響を受けると考えていたが、これらの間に関連は認められなかった。見えないものへの感受性や暗黙的なものの受容性、矛盾や曖昧さに対する耐性といったある種の非合理的な事柄は、相手の能力や過去の実績、市場での評判といった客観的事実を判断材料とし、合理的に期待を形成する信頼にはつながらないと考えられる。

#### V. おわりに

本稿は、信頼と論理的思考、および抽象的思考について簡単な統計分析を行い、関連性を検討することを意図していた。結果としては、平山・楠見（2004）の論理的思考への自覚のうち、論理的思考への自信が所属組織への信頼に影響していた。

本稿の貢献は以下のように要約できる。まず、因子分析の結果、オリジナルの質問項目から構成される抽象的思考への態度は平山・楠見（2004）で提示された

論理的思考への自覚とは別の概念である可能性が示された。経営学の領域では、抽象的思考が扱われた例はほとんどなく、今後議論の余地がある。また、平山・楠見（2004）の論理的思考への自覚がポジティブなものとならぬものに分別された点は、尺度の再検討の可能性を示唆している。

パス解析の結果については、単純な因果構造しか検討していないという問題がある。また、信頼は「自分の会社を信頼して仕事をしている」かどうか、および「同僚の多くは会社のことを信頼している」かどうかという問いで測定したものにすぎない。所属組織に対する合理的な判断（期待）を問うことで、違った結果が得られた可能性はある。さらに、脚注4でも述べたように、論理的思考の今日的な意味についてはさらなる議論が必要である。

\*本稿は、学術研究助成基金助成金（若手研究（B）：課題番号15K17136）の助成を受けている。

#### 注

- 1) 「ロジカルシンキング（論理的思考）とは？就活に役立つ論理的思考の身に付け方」『TOWN WORK マガジン』（<https://townwork.net/magazine/skill/51766/>）
- 2) 「小学校段階における論理的思考力や創造性、問題解決能力等の育成とプログラミング教育に関する有識者会議」（文部科学省；[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/122/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/122/index.htm)）
- 3) 関西大学初等部（2012）では「思考力」と表現しているが、その主旨は本稿の論理的思考と同じである。
- 4) 赤川（2009）のような意味での論理的思考は、経営学よりも心理学、中でも教育心理学で議論されている。ここでは、各段階の生徒・学生を対象に論理学の推論（三段論法など）を行わせた実験が多い。論理的思考は、形式的に正しい変換による情報処理の能力、あるいは形式的に正しい変換とそうでない変換を弁別しうる能力と定義される（波多野，1972）。三段論法のような論理学の推論を正しく行うこと（能力）は、当然のことながら、筋道を立てて考え、経営における問題を解決していくことにつながる。しかし、今日社会で求められている論理的思考は、論理学的推論以外の意味も内包していると思われる。換言すれば、論理学的推論の巧拙は、論理的思考を構成する1つの要素と考えられる。また、類似の問題意識と思われるものには、問題解決思考（能力）やデザイン思考などもある。これらの点については、稿を改めて検討したい。
- 5) 「抽象」とは「事物または表象からある要素・側面・性質をぬきだして把握すること」である（デジタル大辞泉；小学館）。
- 6) 「合理的」とは「道理や論理にかなっているさま」を意味する（デジタル大辞泉；小学館）。
- 7) 前者の1対1の信頼は主体が特定の人や組織を信頼する／しないに関するものであり、後者の広範な信頼は主体を特定せずに「ある集団ないし組織の中に信頼が存在する／しない」ことを扱っている（鈴木，2013）。
- 8) 「どうふるまうべきかについて正否の基準がないときにも、自ら考えて行動するように心がけている」と「一見矛盾しているように見える問題の中から、解決の糸口を見つけることは得意な方だ」の2項目を除いた。

#### 【参考文献】

- Ennis, R.H. (1987). A taxonomy of critical thinking dispositions and abilities, In J.B. Baron & R.J. Sternberg (Eds.), *Teaching thinking skills: Theory and practice*. (pp.9-26) New York: W.H. Freeman and Company.
- Putnam, R.D. (1993). *Making Democracy Work*, Princeton, NJ: Princeton University Press. (河田潤一訳 (2001). 『哲学する民主主義－伝統と改革の市民的構造』NTT出版).
- 赤川元昭 (2009). 「経営における論理的思考」『経営情報学会 全国研究発表大会要旨集』 52.
- 石原武政 (2007). 『「論理的」思考のすすめ』有斐閣.
- 伊丹敬之・西野和美 (2004). 『ケースブック 経営戦略の論理』日本経済新聞社.
- 内田樹 (2004). 『死と身体 コミュニケーションの磁場』医学書院.
- 内田樹 (2011). 『ひとりでは生きられないのも芸のうち 文庫版』文春文庫.
- 関西大学初等部 (2012). 『関大初等部式 思考力育成法』さくら社.
- 神吉直人 (2017). 「経営学研究における信頼概念」『成熟社会研究所紀要』1, 17-24.
- 神吉直人 (2018). 「組織不祥事と倫理性に関する考察」『成熟社会研究所紀要』2, 1-8.
- 北村良子 (2018). 『論理的思考が6時間で身につく本』大和出版.
- 楠見孝 (2014). 「ホワイトカラーの熟達化を支える実践知の獲得」『組織科学』48(2), 6-15.
- 鈴木竜太 (2013). 『関わり合う職場のマネジメント』有斐閣.
- 中川啓子・佐藤友美子 (2018). 「プロジェクト科目における論理思考育成トライアルー授業プログラムとワークシートで振り返る実践記録ー」『成熟社会研究所紀要』2, 21-33.
- 中村和彦 (2015). 『入門 組織開発』光文社新書.
- 波多野諠余夫 (1972). 「論理的思考の訓練 (一)」『児童心理』26(3), 167-184.
- 服部泰宏 (2008). 「日本企業における心理的契約の探索的研究：契約内容と履行状況、企業への信頼に対する影響」『組織科学』42(2), 75-88.
- 平山のみ・楠見孝 (2004). 「批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響－証拠評価と結論生成課題を用いた検討－」『教育心理学研究』52(2), 186-198.
- 真鍋誠司・延岡健太郎 (2003). 「信頼の源泉とその類型化」『国民経済雑誌』187(5), 53-65.
- 森博嗣 (2013). 『人間はいろいろな問題についてどう考えて

- いけば良いのか』新潮新書.
- 山岸俊男 (1998). 『信頼の構造－こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会.
- 鷺田清一 (2014). 『哲学の使い方』岩波新書.
- 鷺田祐一 (2016). 「ワークショップ型会議での非言語コミュニケーションの特徴分析」『組織科学』49(4), 16-28.

## 大学生の論理的思考力育成の可能性についての考察

佐藤 友美子

### I. はじめに

大学全入時代となり、大学生の学力の低下が問題となっている。その解決策として入学前教育、初年次教育、リメディアル教育など、アメリカ型の学習支援施策が多く大学の導入され、今に至るが、残念ながら十分な成果を上げているとは言えない状況にある。本家アメリカにおいても、その成果が十分にでないことは、「アメリカの大学に学ぶ学習支援の手引き」谷川裕稔・編（ナカニシヤ出版 2017）にアメリカのデータをあげ解説されている。

特に私立大学においては、不本意入学で意欲のない学生や、試験を経ずに入学した学生、経済的困難からアルバイトを優先する学生、そもそも大学で勉強する意欲がない学生など、個別の事情を抱えた学生が多く、大学側の意図が学生に十分に行き届いているとは言えない状況にある。

能力が高い学生がいないわけではないが、大学で学ぶに必要な基礎的な力が不足している学生が一定数存在している。授業には出てきても、教員の言葉や内容が理解できず、解らないので勉強もしない、という悪循環に陥っているのである。入試の多様化の中で、学生の能力差は大きく、不足部分を大学で埋めることが出来ないまま卒業することになる。しかし、入口を狭めて、大学教育を受ける機会を奪うのは本末転倒である。むしろ大学4年間で、大学までの遅れを取り戻し、大学教育をプラスして、これからの社会で活躍できる人材に育て、送り出すことが求められているのである。

2012年に出された中央教育審議会の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」では、主体的な学修を促す学士課程教育の質的転換が必要とされ、アクティブラーニングなどの導入が急がれてきた。一方、社会人になった時に求められる能力と

して経済産業省が提唱しているのが「社会人基礎力」である。ここでは「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の三つの能力とそれらを構成する12の能力要素が示されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として明示されている。企業の教育力が低下していると言われる中で、大学教育への期待は高まっている。人生100年時代を生き抜くための、学習経験を自分のものとし、学び続けるための汎用的スキルをしっかりと大学で学ぶことは、これまで以上に重要になっている。

社会が期待する学士課程教育の「質」を担保するには、これまでの「大学生なのだから出来て当然、わかっただけ」という思いこみを排し、個々の学生の能力に向き合い、躓いたところにまで戻ることを促し、そこから支援するしか、方法はないだろう。

この研究ノートでは、大学生の置かれている状況、課題を探り、大学の学修において、また社会に出て仕事をする上で基本となる、論理的思考力に焦点を当て、その習得のための手掛かりを、様々な角度から探っていくこととする。

大学は専門的分野を教える場として、基本的な論理的思考力について特に教えることは行っておらず、一部選択的な科目としてロジカルシンキングやクリティカルシンキングなどが用意されている。一方で、社会人向けには論理的思考力育成のためのセミナーが盛んに行われ、書籍も多く出版されている。しかし、ここでは、商品開発やマーケティングの手法としての論理的思考ではなく、大学までの学習や家庭生活で身に付けることが想定されているきちんとした筋道を立てて考え、説明する力、を身に付けるどんな場面でも必要とされる汎用的な力とする。

## II. 論理的思考をめぐる状況

### 2-1. 文部科学省の施策

中央教育審議会大学分科会制度・教育部会の2008年3月の「学士課程教育の構築に向けて」の第2章改革の基本方針～競争と協同、多様性と標準性の調和を～には、大学生の現状がまとめられている。(8)

○教育課程編成・実施の方針に基づき、学生を本気で学ばせること、単位制度を実質化させることは、「入難出易」と形容されてきた我が国の大学にとって、これまでも大きな課題であった。「大学全入」時代においては、教育課程の内容に止まらず、指導方法、成績評価の改善を併せて講じ、社会で通用する力を確実に身に付けさせることが、いよいよ重要となっている。その際、学生の視点を踏まえつつ、学習者本位の改革を進めていくことが必要である。

○目的意識の希薄化、学習意欲の低下等、学生の多様化により、大学側の対応の困難性は増してきている。最終的には、「課題探求能力」という高等教育に相応しい高次の目標の達成に努める必要があるが、一方で、基礎的な読解力や文章表現力などを修得させることを避けては通れない。また、学生に目的意識を持たせ、学習意欲を喚起する観点から、地域や産業界との連携を深め、外部人材の積極的な参画を得たり、質の高い体験活動の機会を積極的に設けたりするなど、開かれた教育活動を推進することが有意義である。

上記の問題意識から、大学の入口から出口での管理も行われるようになり、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを多くの大学では策定し、公表している。枠組みは出来、情報公開も行われるようになった。しかし、2014年に大学入試センター研究開発部が実施した「アドミッション・ポリシーに関する調査報告書」によると、入学者受け入れ時に、高等学校段階で習得しておくべき内容・水準を具体的に求めている大学数は国立の70.7%に比べ私立では39.9%に留まっている。その上、入学者のアドミッション・ポリシーの認知度も低いという結果が出ている。

一方で、大学入試制度の改革が進んでいる。2016年文部科学省の高大接続システム改革会議で出された

報告書には、高等学校で求められ諸能力の育成のために各教科で重視すべきプロセスとして、「大学希望者学力評価テスト（仮称）」において、一定の定義がなされている。これまでの「知識」を評価する選抜方法から、以下のように学びのプロセスに焦点が当てられており、まさに論理的思考力を問うことになっている。

- ①内容に関する十分な知識と本質的な理解を基に問題を主体的に発見・定義し、
- ②様々な情報を統合し構造化しながら問題解決に向けて主体的に思考・判断し、
- ③そのプロセスや結果について主体的に表現したり実行したりするために必要な諸能力をいかに適切に評価するかを重視すべき。

テストで、これらの能力が容易に計れるのか、疑問視する意見も出ている。しかし、これがターニングポイントとなり、大学の教育において、論理的思考力がより重要視されることは間違いがないだろう。

### 2-2. 大学の取り組みの評価

大学が実施している様々な施策は効果を発揮したのか、その点を点検してみたい。

高大接続の観点から、初年次教育が大学に導入されるようになってほぼ20年が経過した。初年次教育学会も設立11年目を迎え、実施している大学は私立大学の8割を超えている。しかし、学会の10周年記念号「進化する初年次教育」（世界思想社）では、会員調査の結果を、教員が学生の多様化・高度化する中で戸惑い、疲労感を強めているとまとめられている。

大学から社会への接続を考えたキャリア教育にも課題がある。文部科学省（2017年）の調査によると「教育過程を通じ、キャリアに関して身につけるべき知識や能力の明確化と到達点の評価を行っている」という大学は半数に過ぎない。また育英会と京都大学の溝上慎一教授が2007年から実施している「大学生のキャリア意識調査」では、大学生の学力はむしろ高校卒業時より下がっているという結果が出ている。

国立情報学研究所社会共有知研究センター新井紀子教授が主導し開発した「大学生数学基本調査」（2011）では、多くの私立大学で正当率が5割を切る結果となり、論理的な読解力と推論の力の不足が指摘されている。その後実施されている「リーディングスキルテスト」では、本来なら小中学校で身につけているはずの

基礎的読解力がついていない、という結果が出されている。

対処療法的な対応や本質的な問題を棚上げにした理想論では解決できない、根の深い問題として大学生の学力問題を捉えることが喫緊の課題となっている。

### 2-3. アクティブラーニングを巡って

そのような状況の中で、文部科学省は能動的学びに繋がると言われるアクティブラーニングを学習指導要領の中で推奨している。大学においても補助金の要件となるなど、積極的に推し進めていく方針が示されている。しかし、アクティブラーニングを行うためには、様々な課題がある。多くの教員にとってアクティブラーニングの教科書を参考にして授業を設計、実際に行っても、納得の行く結果になることは少なく、質の高い学修に繋がる授業をするのは大変難しい。

失敗の要因は複雑に絡み合っているが、アクティブラーニングを実践する以前のところに課題があることが多い。「無理をしない」「わかったつもり」でいる学生の多くは、読書量が少なく、新聞も読まないため、自分の知っていることだけの浅い情報に終始し、広がりもなく、深まらない。その上、知識や情報を整理し、組み立てるための基本ともいえる論理的な思考力が不足しており、説得力のある結果を導きだすことが出来ない。知識の不足は、情報検索すれば補うことが出来る。しかし、論理的に思考するという能力がなければ、満足に行く結果は生まれない。

AIに仕事を奪われるのではないか、という危機感を持つ時代にあって、創造的仕事をする能力を有することが、これまで以上に必要となる。変化する社会を生き抜く力そのものと言っても過言ではないだろう。特別の職種のための、特別のスキルである時代は過去のものと言えるだろう。

大学入学までに基本的な論理的に思考をする能力がっていないのであれば、大学教育の中で使いこなせるようにすることが、大学の責務である。グローバルな時代、先の見通せない時代を生きることが求められる中であって、課題解決型の能動的学修（アクティブラーニング）が、求められている。それを効果のあるものにするためには、汎用的な論理的思考力をつけることは必須条件である。

## Ⅲ. 論理的思考力育成のアプローチ

基礎的な読解力や文章表現は小・中学校の時の学習

が基本になっており、後でその能力を付ける事は容易ではないと言われている。文部科学省の「平成29年度小・中学校新教育課程説明会」の資料によると、教育効果の高い学校は低い学校に比べると「表現力・課題探究力の向上」「授業スタイル」「少人数・IT・補充学習」「学校外リソースの活用」「実践的研修・研修成果の活用」などで有為な差が見られた。また習熟度別指導も行っている学校では、必要に応じて補充学習を行うなど、一人一人の能力に合わせたきめ細かい指導が行われており、その成果は確実に実を結んでいる。意識的に教育を行うことで成果が得られることは、この結果から小・中学校では証明されているといえるだろう。

大学生が読めない、書けない、ということについては、多くの教員が共有している認識であろう。そもそも小学校から高等学校までの間に読むことはあっても、感想文のようなもの以外、書くという訓練をした経験は無いに等しいだろう。文章という形にする前に、考えなければいけないことがあるのではないか。大学の4年間を、教員個々の学問的興味関心を教える、というだけにとどまらず、汎用的能力、基礎であるジェネリックスキルを計画的に、総合的に伸ばすことが必要であろう。

具体的な事例や教員の体験から、課題解決の道を探ってみたい。

### 3-1. 読む力を巡って

昨年話題になった「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」新井紀子著（東洋経済新報社2018）には、日本の中高校生の多くは、中学の教科書の文章が正確に理解できていない、という調査結果が出ている。私自身、数学の文章題といわれるものを解けない生徒が実は文章の意味が解っていなかったという経験があるが、それは特別な例ではなく、一般的な現象であったのだ。高校生までに付けておくべき読解力がついていない大学生に、ライティングや論理的な思考を教えようとするは無謀なのではないか、という気持ちになる。

新井は「大学生数学基本調査」を行い、その結果を見て「誰でもが教科書の記述は理解できているはず」という前提に疑問を持つ。それを証明するために、全国2万5000人を対象にした基礎的読解力に関する調査を実施するに至る。基礎読解力と偏差値の相関性の高さをデータから読み取り、そのことから、「基礎読解力が低いと、偏差値の高い高校には入れない」こと

を明らかにし、上位大学への進学率は偏差値の高い高校の教育の成果ではなく、中学までの教育が後の伸びを支えていることを指摘している。教科書や参考書の意味が解るか、解らないか、で大きく道は分かれているのである。「東大に入れる読解力が12歳の段階で身に付いているから東大に入れる可能性が他の生徒より圧倒的に高い」、高校で伸びたから偏差値の高い大学に受かるのではなく、そもそもその力が付いていたことの結果であったのだ。

基礎読解力とは何によって身に付くか、という問いに対しては、読書習慣、学習環境、得意科目、スマートフォン、性別もアンケート結果では目立つ相関が見つからない。相関が見つかったのは、就学補助率との間であった。貧困は読解力能力値にマイナスの影響を与えるということが数字からは読み取れるという。

以下は「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」にある結果のまとめである。

- ・中学校を卒業する段階で、約3割が（内容理解を伴わない）表層的な読解もできない
- ・学力中位の高校でも、半数以上が内容理解を要する読解ができない
- ・進学率100%の進学校でも、内容理解を要する読解問題の正答率は50%強程度である
- ・読解能力値と進学できる高校の偏差値との相関は極めて高い
- ・読解能力値は中学生の間は平均的に向上する
- ・読解能力値は高校では向上していない
- ・読解能力値と家庭の経済状態には負の相関がある
- ・通塾の有無と読解能力値は無関係
- ・読書の好き嫌い、科目の得意不得意、1日のスマートフォンの利用時間や学習時間などの自己申告結果と基礎読解力には相関はない

（中略）

日本は欧米に羨まれる画期的に低い失業率を維持しています。それを維持するためには、最低限、作業マニュアルや安全マニュアルを読んで、その内容を理解する必要があります。そのためには、教科書が読める読解力が是非とも必要なのです。(228)

新井はAIロボットを開発する中での経験から、デジタルドリルで英単語や漢字を身につけることは出来ても、読解力を身に付けられない限り、あるときから伸びなくなるといったロボットの実験結果を紹介し、フレームが決まっているITドリルの限界を指摘している。

また、アクティブラーニングに関しては「教科書を読めない学生が、どのようにすれば自ら調べられるのでしょうか。自分の考えを論理的に説明したり、相手の意見を正確に理解したり、推論したりできない学生が、どのようにすれば議論ができるのでしょうか。『推論』や『イメージ同定』などの高度な読解力の問題の正答率がすくなくとも7割ぐらゐは超えないと、アクティブラーニングは無理だと私は考えています」(235)と否定的である。

「大学生の思考力が足りないのは、センター入試がマークシート方式だからではありません。RSTの結果から明らかです。教科書を読める能力を身につけないまま大学に入学している学生が多いからです」(247)

実際アクティブラーニングを授業に取り入れた時に感じる学生の反応の鈍さ、問われていることの意味が理解できていないことに起因していたのだ。

今レポートでは大学生が論理的思考力を習得できるか否かが重要な問いであるが、中学生で読解能力を獲得できなかったものは、以降に能力をつけることができるのか、という点である。高校で調べた結果からは、向上は見られず、その原因も未だ解明されていない。しかし、身近な事例で、繰り返しやったり、必要に迫られ伸びた事例、教員が工夫して教えることで、効果が出ていることを、書き添えている。また自身の経験から、「多読ではなく、精読、深読に、なんらかのヒントがあるのかも」(246)と書いている。「銀の匙」という一冊の本を6年かけて教える伝説の灘校国語教師橋本武の実践とも繋がる話である。

佐藤優は社会人向けの「国語ゼミ AI時代を生き抜く集中講座」(NHK出版2018)で、新井の報告に触発された形で、アクティブラーニングを成立させる条件として、学びの「型」を習得する必要性を説き、「単なる思いつきを発表したり、その場しのぎで意見を言い合ったりするだけの場になってしまっただけでは、学びにとっては逆効果」(14)とし、アクティブな表現は、パッシブな知識なしには出来ないとして述べている。

また、あらゆる勉強の基本は「読む力」であり、学びにとって、いちばん基本となる「型」は「読む力」で学ぶ。勉強の基本は「守・破・離」であり、第一段階では、師匠について形を守る。第二段階では、その型を自分流にひきつけて考えることで、自分にあった型をつくる。そして既存の型を「破る」。そして、従来の型から完全に自由になり、型から「離れ」て、発展していく、とする。

計算能力では人間はAIに勝つことはできないが、意味理解の力ではAIより優っている。「『読む力』を土台にしてこそ、自らも命題を発見して能動的に思考する力、すなわち本書でいう「国語力」も付いていく」とする。教科書を活用した三段階の学習方法が提案されている。

- ・ステップ1「要約と敷衍」：教科書を正確に読み解くために「音読」する。そのうえで、教科書の指摘箇所を自らの言葉で要約し、敷衍する訓練を行う。
- ・ステップ2「比較」：教科書の複数の記述を比較して、物事を複眼的に捉える訓練を行う。
- ・ステップ3「能動的読解」：自ら立てたテーマや問題意識に即して、複数の教科書を能動的に読む訓練を行う。(26)

音読が読み飛ばしを防ぎ、文章構造を捉え損ねる、大事な概念やキーワードを理解せずに読み進めることを防ぐという指摘は、学生だけでなく、大人にも十分当てはまる。読めない漢字や意味を調べることは、物事を知る第一歩といえるだろう。要約・敷衍は「抽象的な概念や文章を自分の言葉でかみ砕いて解りやすく説明すること」(30)である。多くの学生は抜き出して、羅列しただけで終わっている。ポイントとなる文章を抜粋し、再構成まで出来て初めて出来たことになる、そこまでの指導をしっかりとする必要があるだろう。

比較は違うことだけに目が行きがちであるが、共通点を指摘することが必要だと説く。その場合「観点・項目を揃える」ことも必要になる。

能動的読解は、自らの問題意識にもとづいて教科書を読み解いていくアプローチであるとし、難しく考えなくても、疑問に思ったことを調べればいい、というのが佐藤の考え方だ。

読む才能があるわけではなく、訓練し、自分のものにしていくプロセスを経ることなく、読めるようにはならない。「読む力」を鍛えることは「論理的思考力」や「判断力」のための基礎力養成するため基盤を造ることである。

ライティングセンターを有する大学はあっても、読むことには多くの注意を払ってこなかった。読めなければ、書くことはできない。原点に戻って、しっかり読む教育、読む技術の教育が必要ということだろう。

### 3-2. 整理する力を巡って

池上彰は「考える力がつく本」(プレジデント社2016)の中で、大事なのは、「自分は何がわからないか」を知ることだと書いている。「私はわからない言葉がでてくると、まずその言葉の意味や由来を調べることから始めます」(23)物知りの代名詞のように言われている池上の原点はシンプルな好奇心だったのだ。そもそもどうだったかに、関心を持ち、「過去→現在→未来の時間軸の中で、世界→国家→個人の動きへと振り返っていくと整理しやすい」(35)と記している。「わかる」とは、自分がこれまで持っているバラバラの知識がひとつの理論の下でまとまったとき、知識と知識の関係を示す補助線を引くということ、と定義する。

また、「論理的に説明されて何となくわかるけれど、いまひとつ腑に落ちないときにはビジュアル化したもので説明するといいい」(50)と、図式することによって自分自身もわかりやすくなることを示唆している。アメリカ共和党の二大勢力をあらわすときもベン図を使うと解りやすく、イスラム教徒の全体像を集合の概念でベン図を使って説明すると、イスラム原理主義過激派が、イスラム教徒の中の特殊な存在だということがわかり、イスラム教徒への偏見も無くなると説明する。また複雑なシリア情勢は「相関図」を使い説明し、また別のテーマでは、二つの指標に対して、要素がどういう位置関係なのかが見やすく説明できる座標軸で頭の整理をするという。

「声にだして読みたい日本語」をあらわした齋藤孝の「数学力は国語力」(集英社2010)には、論理の力が文脈を読む力であり、文章を読みこむ時、また話すとき、数学と国語の混合力が必要だ、という主張が展開されている。河合隼雄の話し方を「言葉というものが、論理上のポイントを指摘するという働きのほかに、感情を整える力も持っていて、二つは両立できるというのが、実感としてよくわかります。これは、おそらく、国語と数学の二つの能力が、同時に働いているからではないでしょうか」(19)と解説する。

実は、齋藤の原点には中学の時に学んだ証明問題のすっきり感が存在している。日本の政治家の答弁には、数学でいえば基本である証明問題の作法が共有されておらず、言語不明、意味不明な状態に落ちていつていることを指摘する。ベン図や座標軸を使えば、ものごとは整理され、共通の土俵で話すことが出来、会議などもスムーズに運ぶことを、自分の経験から語っている。

図形だけでなく、数式も同じような効果があるという。因数分解は「共通のものを括る」ということで説明しやすくなり、すっきりするという効能がある。関数は音楽のような働きがあり、新しいものを生みだすきっかけとなる。ベクトルや座標軸など、中学・高校で学んだ数学が実は、教科書の中の出来事ではなく、物事の理解を進め、感動と結び付くべきものである。等々、数学の勉強を、教科書の中に閉じ込め、ただの作業にしてしまったことの罪を指摘する。

試験を離れたところで出会う数学的発想には様々な可能性がある。比例、確率、統計的な思考、補助線なども、様々な場で使ってこそ意味がある。混迷する社会にあって「グローバリゼーションというアメリカ的な新自由主義の掛け声をつゆも疑うことなく、確率や統計といった手法を使って緻密にリスク管理することを怠り、あげくの果てにみんなで世界同時不況につつまってしまった今の金融や経済の状況なども、新自由主義を否定すれば事が済んでしまうような、単純な話ではないと思います。(中略) その意味では、算数や数学にある客観性や絶対性を、国語の力や健全な身体感覚と統合する教育と個々の努力が、今の社会、今の人たちにこそ必要なのかもしれません」(212)と、数学的な分析をしないことに警鐘を鳴らす。

論理が万能ではないことも指摘しつつ、『『論理的に考える』『論理的に話す』というテーマは、とても需要が多い。(中略) 私たちが学んできた算数・数学の知識でも十分に活用できる」(224)と自らの体験から述べている。

池上も齋藤も頭を整理するためのツールを持っており、それを適宜使っていることがわかる。人に説明するときだけでなく、自分自身が理解するためにも有効な手段として、いくつかのツールをあげている。

小学校の教育で思考ツールを利用する動きが「関大初等部式 思考力育成法」(さくら社 2012)という形で行われている。頭の中の知識を可視化し、整理することは、年齢に関係なく、有効な手段であることは間違いないだろう。思考ツールの活用を促すことが出来れば、大学生にとっても考えを整理する有効な方法を習得することになるであろう。

### 3-3. 書く力を巡って

書くことに関しては大学生向けのアカデミックライティングを学ぶために多くの書籍がある。初年次教育の中でも扱われ、ライティングセンターで必要に応じ教育するというも行われている。ロングセラーと

言われるものも多く1994年刊の木下是雄の「レポートの組み立て方」(ちくま学芸文庫)、戸田山和久の2002年に初版が出て新版になった「新版論文の教室」NHK ブックス(2012)など、息の長い物が多く、親しんでいる学生も多いはずだ。

しかし、大学で日常的に提出される学生のレポートは、スマホで書いたものが、そのまま段落もない状態で送られてくることも珍しくない。推敲して文章を完成させるという過程を学生は知らないのではないかと、思うこともある。

ここでは、2013年結城浩「数学文章作法基礎編」(ちくま学芸文庫)2014年「数学文章作法推敲編」(ちくま学芸文庫)に着目したい。プログラマ、ライターである著者のこの二冊の本での主張は、大変解りやすく、ポイントを突いている。原則は「読者のことを考える」であり、そのためにいかに正確で読みやすい文章にするかが説かれている。読者に伝わる文章を書くためには、読者の知識がどのくらいか、読者の意欲はあるのか、読者は何のために読むのか、という三点が必須であるとする。推敲編における推敲の目的は、読者が文章を読むことを念頭におき、読者の迷いを理解し、言葉の使い方や長文、言葉不足、無駄な言葉、不明確な指示語を無くすことにある。結城は推敲するときに必要なのは「著者の帽子を捨て、読者の帽子をかぶる」ことの大切さを説いている。

文章を一度で書きあげられる人がどれほどいるだろうか。授業時間内にせいぜい10行程度でコミュニケーションペーパーやリアクションペーパーと言われるものを書く中で培われる能力とは何か。多くは単なる授業の感想であって、教師という読者がいることを意識し、論点を整理し、自分なりの主張を書く学生は少数である。

「大学における書く力考える力」(東信堂 2008)や「思考を鍛えるレポート・論文作成法」(慶應義塾大学出版会 2013)などの著書のある井下千衣子は大学における書く力とは、単に定型的文章・論文の作成技術ではない。そうした形式技術訓練を超えて、学習経験を内的に自己と結び付け、「自分にとって意味のある知識として再構造化する能力」と定義し、だからこそ、一生を通じての宝となるものであり、教育もそのようなものでなくてはならないとしている。

書くことは大学生にとって、とても重要な学修の機会である。それなりの指導も行われている。しかし、一人一人の学生を指導することは容易ではない。実態は学生が書いて終わりになっているのではないかと、書

くための基礎基本、人を納得させるための論証の書き方など、ノートの取り方やフレームを使って段階的に出来るようにする、等の指導の工夫が必要であろう。

### 3.4. 伝える力を巡って

上田正仁の『『伝える力』の鍛え方』（初版はブックマン社 2015）PHP 文庫（2018）は、『『考える力』の鍛え方』（初版はブックマン社 2013）PHP 文庫（2017）の続編にあたるものである。

『『考える力』の鍛え方』は優秀さの尺度が「マニュアル力」から「考える力」に変化することで戸惑う東大生向けに、試行錯誤を繰り返してきた過程で得られたノウハウが紹介されている。問題を発見し、アイデアを思いつくための着実な方法がある、として、研究テーマをみつけるための方法を説いている。「自ら考え、創造する力」を養うのに必要な三つのステップを以下のように説明する。

- (1) 「問題を見つける力」他の人は誰も疑問に感じないところ、常識だとか考えられているところに問題点を見出す能力
- (2) 「説く力」自ら創造した課題に取り組み、克服すべき問題点を整理・分析・分解し、答えに至る能力
- (3) 「諦めない人間力」目に見える成果でなくても、諦めず、根本的な解決・答えを見つけ出すまで粘り強く考え続ける能力 (39)

この思考のトレーニング法を実践すれば誰でも実践できるとしている。

『『伝える』力の鍛え方』は学生だけでなく、教員も上司も親も「誰もが『伝わらない』と悩んでいる」ことに気づき、その解決策を提示したものである。

同じ言葉であっても、その受け止め方は時代とともに変わり、伝え手と聞き手の世代や育った環境が異なれば、同じ言葉が違った意味に解釈される。また、伝わらない本当の理由は、「真剣になって話している」行為が、相手がそれをどう受け止めるか考えない一方的な伝え方だからであり、伝え手と受け手の間のコミュニケーションが成立していない (23) ためであると説明する。

コミュニケーションは、伝えたいメッセージが何かを明確にし、それを相手が置かれている状況を考えながら伝えることで、初めて成立することを説明し、上田は「考える力」の時と同じように、「伝える力」を

3つのレベルに大別する。

レベル 1----「用事が足りる伝え方」（伝言など、マニュアル通りに伝えられるレベル）

レベル 2----「聞く気にさせる伝え方」（プレゼンテーション、意志表示など、考える力が必要なレベル）

レベル 3----「人を動かす伝え方」（交渉など、創造力が必要なレベル）(34)

どのレベルでも必要となるのは、「用件の幹と枝葉を区別し、幹から話す」ことを心掛けることであり、「聞き手の力を借りて」「聞く気にさせて」伝えることの重要性を説いている。また事実と自分自身の意見を峻別することも重要であるとする。

自分の言葉や考えの中でどこまでが「事実」で、どこからが「意見」なのかを普段から意識することは、言いたいことを伝わりやすくするだけでなく、物事を分析的にみるための訓練にもなる。(78)

伝えたいメッセージに向かって「最短距離」で、「論理的」に「わかりやすい」道筋を構成することが重要になる。(89)

「何を言うか」を決めることは、同時に「何を言わないか」を決めることでもある。(94)

力や権力に頼らない「人を動かす伝え方」とは、人が自分の利益や成長のため、あるいは、大切なもののために、自らすすんで行動するようになる「心を動かす伝え方」だといえます。(149)

交渉とは、お互いの望みをしっかりと伝え合うことで、双方がウィン・ウィンの関係になるための創造的なプロセスである。(153)

上田は「考える力」と「伝える力」は、どちらも意識的な訓練によって鍛えることができる、人がより良く生きていくための原動力と説明している。

「書く」という行為以上に「伝える」には相手の要素が強くなる。その為には、一般的なコミュニケーション能力だけでなく、瞬時の判断力も必要となる。これらは机上の学修で容易に身に付くものでは無いので、ディベートやPBL（問題解決型）などの実践的な機会を捉えての学修が必要となるであろう。

#### IV. 論理的思考力育成をサポートするために

大学生が読む力や書く力、論理的思考力をつけることは容易ではない。しかし、不可能だと断言する人はいない。一朝一夕に身に付くものでないが、段階を踏み、努力すれば訓練によって身に付くものだと書かれている。初歩から、少しずつ自分のモノにしていく過程を経て、ステップアップし、論理的思考力もその過程で付いていく。それが学ぶということなのであろう。大学生の難しさは、仕上げの時期にきているが、途中で脱落し、停滞あるいは後退している状況にあることだ。出来ないところまで戻ることの大切さをどのように説明し、納得させるか、が大きな課題である。

学ぶということに意味を見出さない学生に、その思いが簡単に届くとは考えられない。単位取得などを餌にしても、本当のやる気には結びつかないだろう。無理やり水飲み場に来させるのではなく、自分の意志で水飲み場に赴き、いつの間にか学んでいる、そういう状況を作りだすことはできないのだろうか。

学修を個人的な活動として閉じ込めてしまえば、現代のような上昇志向が乏しい学生に、教員が個人の発意を刺激することは、相当に難しい。まじめに授業に参加することが求められる中で、授業には参加しているが、ノートをとる学生は少数派である。数十年前であれば教師の熱い思いは、伝わったかもしれないが、今、学生の多くは無関心で、一つ間違えば、熱血指導はパワハラと言われることにもなる。

経験的に学生が伸びると感じるのは、学生同士の関係性の中に生じる上昇志向の空気ではなかろうか。批判のあるアクティブラーニングであるが、時として学生の成長を実感するような展開をみせることがある。それは、学生の言葉を借りると、「意識高い系」の学生が数人交じる時である。一部の学生の前向きな発言や行動が全体を押し上げるのである。教師によって伸びるのではなく、同世代の学生の自分とは違う熱意や姿勢を垣間見る時、これまで消極的だった学生が変わる瞬間がある。偶発的で他力本願とも言えるが、その組み合わせを意識的に作ることが可能であれば、学生の成長はある程度期待できるのではないか。今も昔も変わらないのは、人に認められたい、人の役に立ちたい、そして成長したいという願望である。成長実感を得るためには、まず学生自身が躓いたところまで遡り、そこから再スタートとすることが必要である。成長の段階を教師と学生が共有することが必要になって

くる。

本レポートで紹介した書籍は単なるマニュアル本ではない。それぞれの著者が自身の体験の中で知恵を形成していくプロセスともいえるべきものが表現されている。便利な時代にあっても、そのプロセスなくしては、今の彼らはいないということである。AIがいかに進歩しても、自分の頭は自分の努力なくしては、変えられないということなのだろう。むしろ便利なものも上手く使わなければ、成長するのは以前より難しくなっているとも言える。

もう一つの特徴は多くの著者が「鍛える」という言葉を使っていることである。しかし、「根性論の鍛える」では、一部の学生にしか成果はあがらないだろう。一人一人の学生の段階に合わせることの出来る、自分から学びたいと思うようなメソッドの開発が求められるところである。

義務教育で学んだにも関わらず、活用出来ずに断片的な知識に終わっている知識を繋ぎ直し、使いこなす術を身に付けることを日々の学修の中に組み込み、鍛えていく方法について、考えていく必要があるだろう。

#### V. おわりに

一人一人の学生が論理的思考力を獲得し、成長を実感するためには、まずは本人が課題に気づき、教員による無理のない支援で半歩ずつでも、出来ることを増やしていくことが必要である。そのためには、成長のための様々な要素を取り込み、基礎から応用までのプロセスが整理された、いつも身近において時々取り出して、練習をすることが出来る、楽器を学ぶための教則本のような存在が求められていると言えるだろう。今後は論理的思考力を構築するために必要な要素と学びのプロセスについて更に考察し、汎用性のある教則本の可能性について考察していきたい。

以上 (2019.3.4)

#### 参考文献

- L. デイヤー・フィンク著／土持ゲーリー法一監訳 (2011). 『学習経験をつくる大学授業法』玉川大学出版部.
- L・B・ニルソン著／美馬のゆり・伊藤崇達監訳 (2017). 『学生を自己調整学習者に育てる アクティブラーニングのその先へ』北大路書房.
- 新井紀子 (2018). 『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』東洋経済社.

- 池上彰 (2007). 『考える力がつく本』 プレジデント社.
- 池田輝政・松本浩司編 (2016). 『アクティブラーニングを創るまなびのコミュニティ 大学教育を変える教育サロンの挑戦』 ナカニシヤ出版.
- 伊藤氏貴 (2010). 『奇跡の教室：エチ先生と『銀の匙』の子どもたち：伝説の灘校国語教師・橋本武の流儀』 小学館.
- 井下千衣子 (2008). 『大学における書く力考える力』 東信堂.
- 井下千衣子 (2013). 『思考を鍛えるレポート・論文作成法』 慶應義塾大学出版会.
- 上田正仁 (2017). 『「考える力」の鍛え方』 PHP 文庫.
- 上田正仁 (2018). 『「伝える力」の鍛え方』 PHP 文庫.
- 加藤昌治 (2003). 『考具』 CCC メディアハウス.
- 河合塾編著 (2014). 『「学び」の質を保証するアクティブラーニング』 東信堂.
- 河合塾編著 (2013). 『「深い学び」につながるアクティブラーニング』 東信堂.
- 関西大学初等部 (2012). 『関大初等部式 思考力育成法』 さくら社.
- 経済産業省編 (2010). 『社会人基礎力 育成の手引き』 河合塾.
- 高大接続システム改革会議 (2016). 『報告書』 文部科学省.
- 齋藤孝 (2010). 『数学力は国語力』 集英社.
- 佐藤優 (2018). 『国語ゼミ AI時代を生き抜く集中講座』 NHK 出版.
- 佐藤友美子 (2017). 「学士課程教育における論理的思考力育成についての考察」『成熟社会研究所紀要』1, 4-8.
- 自己調整学習研究会監修／岡田涼・中谷素之・伊藤崇達・塚野州一 (2016). 『自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術』 北大路書房.
- 谷川裕稔編 (2017). 『アメリカの大学に学ぶ学習支援の手引き』 ナカニシヤ出版.
- 中央教育審議会 (2017). 『平成 29 年度小・中学校教育過程説明会資料』 文部科学省.
- 中央教育審議会大学分科会 制度・教育部会 (2008). 『学士課程教育の構築に向けて』 中央教育審議会.
- 中央教育審議会 (2012). 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』 文部科学省.
- 戸田山和久 (2012). 『新版論文の教室』 NHK ブックス.
- 外山滋比古 (1983). 『思考の整理学』 筑摩書房.
- 中川啓子・佐藤友美子 (2018). 「プロジェクト科目における論理的思考力育成トライアル」『成熟社会研究所紀要』2, 9-13.
- 西谷尚徳 (2016). 『ロジカル・ライティング』 弘文堂.
- 日本高等教育開発協会・ベネッセ教育総合研究所編 (2016). 『大学生の主体的学びを促すカリキュラム・デザイン』 ナカニシヤ出版.
- 橋本武 (2015). 『伝説の灘校国語教師の「学問のすすめ」』 PHP 文庫.
- 松下佳代 (2015). 『ディープ・アクティブラーニング』 勁草書房.
- 溝上慎一 (2014). 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂.
- 溝上慎一監修／亀倉正彦著 (2016). 『シリーズ7 失敗事例から学ぶ大学でのアクティブラーニング』 東信堂.
- 溝上慎一責任編集 京都大学高等教育開発推進センター／河合塾編 (2015). 『どんな高校生が大学、社会で成長するのか』 学事出版.
- 溝上慎一監修／溝上慎一・成田秀夫編 (2016). 『シリーズ2 アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習』 東信堂.
- 木下是雄 (1994). 『レポートの組み立て方』 ちくま学芸文庫.
- 山田礼子 (2012). 『学士課程教育の質保証へむけて』 東信堂.
- 山地弘起・橋本健夫編著 (2012). 『学生の納得感を高める大学授業』 ナカニシヤ出版.
- 結城浩 (2013). 『数学的文章作法基礎編』 ちくま学芸文庫.
- 結城浩 (2014). 『数学的文章作法推敲編』 ちくま学芸文庫.
- 渡部信一 (2015). 『成熟社会の大学教育』 ナカニシヤ出版.



## プロジェクトレポート

## プロジェクト科目における学生自主企画講座の実施

—授業プログラムおよび講座レポートによる報告—

中川 啓子・佐藤 友美子・村上 亨

## I. 背景および概要

2017年度に授業科目として実施した「プロジェクト7A（前期）」と「プロジェクト8（後期）」は、「若者が自立して生きる力を身につけること」を目的に、若者のための講座を企業等の外部団体と協力しながら学生主体でプランニングするものであるが、翌2018年にも第二期目として、前年度の課題や成果を生かして同様の授業科目を実施した。

第一期（2017年度）の実施詳細については、「プロジェクト科目における論理思考育成トライアル」（中川・佐藤，2018）および「プロジェクト科目における学生の主体的取組みの支援」（神谷・今堀・中川，2018）に記載しているのでそちらを参考にされたい。

このレポートでは、第二期目の授業での取組み内容について、振り返りながら、その成果と課題を記す。

2018年度に実施した授業科目は「プロジェクト1A（前期）」「プロジェクト2A（後期）」（以下、プロジェクト科目）という前年同様の通年授業である。「学生に身近な“食”をメインテーマとすること」と、「外部との連携協力を元に、食に関する若者向けの講座を開催すること」をゴールとしたこと、については変わらないが、授業のサブタイトルは「企業・地域との講座企画プロジェクト」とし、「地域」というキーワードを新たに加えている。これは、前年度の取組み実態から、学生の企画する講座が必ずしも「食品関連企業」とのコラボレーションにはつながらないことが分かり、例えば地元農家や地方自治体、公共公益機関なども含めた、幅広い連携先をイメージしたためである。

定員20名の募集に対して集まった履修生は当初19名だったが、履修放棄およびゼミ重複のため履修できない学生がいたことで、最終的には15名が講座の企画運営を行っている。

15名のうち、3回生4名、2回生11名（1回生は履修対象外）であり、前年は圧倒的に3回生が多かったのに対して2回生が7割を占める構成となった。学部は経営を中心に経済・地域創造・社会・心理と5学部にまたがった。

授業運営については成熟社会研究所が全面的に関わり、所員である教職員複数でワーキングを重ねながら進めていく、教職協働の形をとっている。

なお、プロジェクトの本質は、講座を開催するまでの「道筋」を学生が考え、悩み、組立てていくプロセスを体験することにあることは、前年同様である。

また、2018年6月18日に発生した大阪府北部地震の影響で、休講や外部との再調整が生じ、授業プログラムが計画通りに進められなかった面もあったことを一言述べておく。

2018年度(通年) プロジェクト科目 定員20名/優先履修あり

## 企業・地域との 講座企画プロジェクト

「食」をテーマにした講座づくり  
企画から広報・運営までを体験しながら学ぼう！  
食品企業や地域の飲食店や農家と一緒に実施します。

授業は基本的にグループでの話し合いや活動を中心に進めていきます。教室外での学びの機会も多々あります。

▲参加費について学び、たしの難しさを学ぶ講座を開催したグループ（配布の社長さんをお招きしました）

▲和食のマネー講座を開催したグループ（週末の定食屋さんで実際に和定食をいただきますながら学びました）

現代の若者が自立して生きるために必要な力を身につけることを目的とし、若者向けの講座企画を行います。食業界等の企業や地域の飲食店、農家等と一緒に、食の安全性や災害時の対応、農業や地域発展などを考える機会を、自分たちで考え、実施します（2017年度は4つの講座を開催）。グループに分かれ、講座をゼロから作り上げていくことで、社会力やチーム力を鍛えます。荷葉山寮では企画出張もを行います。

**こんなことをします・こんな力を身につけます！**

- ・フィールドワーク（食品企業視察、地域産業調査など）：観察力！
- ・若者のニーズを調査し、講座の枠組を自分たちで考える：企画力！
- ・協力企業に自分たちの考えを提案し、やり取りして進める：交渉力！
- ・講座のチラシ作成や広報に必要なパソコンスキルを学ぶ：広報力！
- ・講座の準備や当日の受付、司会、進行管理などを行う：運営力！

企画や広報に関心のある人・食品業界に関心のある人におすすめ！

このプロジェクトは、成熟社会研究所と連携し、教員・職員協働チームで運営します

■協賛校・履修希望校のリスト

担当：地域創造学部 佐藤友美子 教授 経済学部 村上亨 教授  
協力：成熟社会研究所 ※お問い合わせ→ seijuku@ccomori.ac.jp  
TEL. 072-665-5366 メール用QRコード

図1 プロジェクト募集ポスター（2018年度）

## II. 授業内容

プロジェクト科目の年間授業スケジュールは表1の通りである。前期は食についての知識収集や自身の食

への関心事項などを考えることを目的に、実習やレポート作成、ディスカッションなどを行った。後期は講座企画・運営が主となっている。

この章では各プログラムの特徴を具体的に紹介する。

表1 プロジェクト科目年間スケジュール (2018年度実施内容に基づく)

## 【2018年度 前期 水曜5限】

No.	月日	授業内容	備考(詳細, 使用した手法・ツールなど)
1	4/11	授業趣旨説明, 他己紹介	バースデーサークル, 私の取扱説明書
2	4/18	前年度の取組み, 食について自己分析	マインドマップ
3	4/25	食のレポートづくり	レポートづくりの流れ 情報収集の手法(日経テレコンなど)
4	5/2	学外実習プラン作戦会議	手書き企画書作り 3項目でアピール, 6W2Hで整理する
5	5/9	学外実習プランコンペ	5グループのプランを評価シートで投票
6	5/16	学外実習プランのグループワーク 食のレポート発表とグループワーク	テーマ決め, 役割分担 話し合いの内容を3つにまとめて発表
7	5/23	調理実習 GLOBAL COOKING 作戦会議 (メニュー, レシピ作り, 段取りなど)	ワークシートを使った話し合い みんなくフィールドワークの準備
8	5/30	映像レクチャー「すべて食べよう」	ドキュメンタリーから食品ロスを学ぶ
9	6/6	グループディスカッション「食品ロス」	食品ロスについて調べた事を発表し合う
10	6/13	「食品ロス」の全体まとめ	キーワードを書いてKJ法で分類整理
課外		国立民族学博物館でのフィールドワーク	調理実習テーマの国について調べる
休講	6/20	大阪府北部地震のため休講	※代わりに食の文献レポート提出 『いま「食べること」を問う』を読んで
11	6/27	みんなくレポート, メニューボード作成	PPTを使ったスライド製作
12	7/4	みんなくレポート発表, 実習打合せ	買うもの, タイムスケジュールなど
13	7/11	調理実習 GLOBAL COOKING	4ヶ国のメニューを調理・プレゼン・実食
14	7/18	食品ロスに関する個別講座仮テーマ設定 仮講座のポスター作成	講座ポスター作りのポイントレクチャー

## 【2018年度 後期 水曜5限】

No.	月日	授業内容	備考(詳細, 使用した手法・ツールなど)
1	9/19	ポスター評価と修正作業	前年度ポスターとの比較評価
2	9/26	ポスター発表	よいプレゼン12ヶ条
3	10/3	映像「プロフェッショナル子ども大学」	商品企画開発ドキュメントから学ぶ テーマ決めて大事にすべき7つのこと
4	10/10	4つの講座テーマに基づく講座企画	ワードによるA4の1枚企画書づくり 企画書に必要な10事項
5	10/17	講座企画の自己評価・修正, 山祭役割分担	上記の事項が反映された内容かを再考
6	10/24	講座企画の発表・評価, 企画の具体化①	山祭用のPRポスター作成
山祭		10/27-28 将軍山祭での企画展示	「食品ロス講座ポスター」
7	10/31	講座企画の具体化②	依頼メールの作成, 交渉, スケジュール
8	11/14	講座企画の具体化③	やるべきこと, スケジュールを考える
9	11/21	講座企画の具体化④	広報の手法と内容を考える
10	11/28	講座企画の実施準備①	広報用チラシの完成, 準備物を考える
11	12/5	講座企画の実施準備②	当日の流れをシミュレーション
講座	12/12	「食品ロスを減らすために」@2311教室	講師: 浅葉めぐみ氏
講座	12/15	「親子で食べものはかせ!」@安威公民館	栄養についての紙芝居やクイズ
講座	12/17	「魔法のスープ」@食堂3階	ベジスープの講座と試食
13	12/19	講座のまとめレポート	第三者に講座の企画から実施までが分かるようにまとめる(概要, 意義, 効果)
講座	1/6	「サルベージパーティー」@ローズワム	講師: 吉野健一氏
14	1/9	講座まとめ発表会, 個別&グループ評価	
15	1/16	ふりかえり会	

## 2-1. 調理実習 GLOBAL COOKING

学外実習として、「食」ということにちなんで調理実習を実施した。内容としては、「和食」「洋食」「中華料理」「インド料理」の4つのグループに分かれ（どの国の料理になるのかはくじ引きで決定する）、それぞれがメニュー作りから買出し、調理までを行うもので、共通食材として「米」「豆腐」を使用するルールとした。

実習企画は、学生グループごとのコンペで決めたもので、他には「オリジナルピザ対決」「お弁当作り体験」「ご当地グルメ」「グランピング」が企画としてあがっていた。コンペ時の評価基準は「プロジェクト科目の趣旨に合っているか」「企画内容が学生ならではのものが自身が参加したいと思えるか」「実現可能性はあるか」の3点とした。

地震の影響で開催日が変更となるなど、いくつかのトラブルには見舞われたが、どのグループもそれぞれ工夫をこらしたメインの米料理1点と副菜を2点を用意し（デザートを作ったグループもあった）、どれも味・量ともに満足のいく仕上がりとなっていた。調理メニューについては、各自プレゼンボードを準備し、食事の前に発表を行った。

この実習で初めて料理をした学生もいたが、各自自分ができることを見つけ、グループ内での協力体制は取れていたように思う。「食べる」というお楽しみが伴うことで、学生自身も楽しく取り組んでいた。



写真1 調理実習の様子（2018.7.11 筆者撮影）

## 2-2. 国立民族学博物館でのフィールドワーク

2-1で述べた調理実習を行うにあたって、ただ料理を作るのではなく、それぞれの料理や国の背景を調べて深めておくために、国立民族学博物館へのフィールドワークを実施した。国立民族学博物館には、様々な

国の生活・文化・伝統などに関する物品やパネル等が展示されており、担当する「国」について、「食」を切り口として見学し、グループごとにまとめを行った。

## 2-3. 食についてのレポート

授業が始まったばかりの時期に、マインドマップを使って、自分の食への関心が何であるのかを見つめるワークを行った。それに基づき、各自「食のレポート」を作成し、関心事についてより深めることと、その深め方（情報収集の仕方）を学ぶ機会とした。

学生が選んだレポートのテーマは、「自分が興味のある食べもの（ヨーグルトや大豆、スイーツなど）について」「食育活動」「好き嫌い」「食の安全性」「食品ロス」など多岐に渡った。

## 2-4. 映像学習

外部講師を招いた講義を行う代わりに、映像ドキュメントによる学習も2回実施した。

前期に視聴した『すべて食べよう』（Peg Leg Films, 2014）は、カナダのディレクター夫婦による実験的ドキュメントである。廃棄される食品だけを食べて約半年を過ごし、その様子をレポートしている。

食品ロスが起こる背景には「規格外だったから」「賞味期限が近いから」「ラベルが欠損しているから」といった、食品そのものの安全とは関係のない理由が存在している。

時にシリアスに、時にユーモアを交えてその現実を伝えるこの作品により、学生には食品ロスが身近で重要な問題であることが伝わったようであった。

後期に視聴したのは『プロフェッショナル 仕事の流儀』（NHK 総合テレビジョン）の「プロフェッショナル子ども大学」（2018.9.17放送）の回である。

伝説のヒットメーカーといわれる株式会社湖池屋の代表取締役である佐藤章氏が、小学生とともに商品開発（新しいお菓子の企画）に取り組む、約1ヶ月に渡る講義である。佐藤氏は、アイデア出しや企画の具体化の難しさに悩み、どの方向でいこうかと迷う小学生たちを、時に優しく時に厳しくアドバイスし、最後には新しい商品が完成する。

商品企画のドキュメントを通じて、学生に「企画」の重要なポイントを学んでもらう意図があった。視聴後、「(自分たちが) 講座のテーマを決める時に大事にすべきことは何か」についてのディスカッションを実施し、学生からは「伝えたいことを絞り込む」「自分

が参加したいと思えるか」「今後活かせるもの」といった意見があがった。

## 2-5. 食品ロスポスター作りと将軍山祭での展示

2-4 に述べた食品ロスに関する映像学習と、ディスカッションを生かし、各自で「食品ロス」に関する仮の講座を企画してポスターにする、というワークを行い、これは夏休みの課題とした。

仕上がったポスターは大学祭である将軍山祭での企画展示としても使用した。

## 2-6. 講座企画および実施

後期の授業は、大半を講座の企画と運営に費やした。

2-5 に述べた食品ロス仮講座ポスターに使われた講座テーマを元にした話合いの結果、4つのテーマが決まり、それぞれ3～5人ずつのグループとなり講座の企画を進めていくこととなった。

コンセプト設計と企画書の作成、外部への依頼メールや交渉、スケジュール管理など、すべきことは膨大であり、各グループともに授業時間外での打合せやSNSでの連絡などを駆使して形に近づけていった。

完成度、達成度はグループごとに差があるが、4つの講座は全て「講座」としての形を成した。

各講座の内容や取組みの記録などは、3章において述べる。

## 2-7. ふりかえりレポートの作成

すべての講座が終了した後、残った2回の授業時間を使って、ふりかえり作業を行った。行った作業は次の2種類である。

1つは講座の企画から実施における「自己評価&グループメンバー評価表」の作成。これは、「①果たした役割（がんばったこと、できたこと、成長したこと）」と「②力不足だったこと（もう少しがんばってほしかったところ）」の二つの視点から自分とメンバーについて具体的な評価を書き込むことと、10点満点での総合評価をつけるものである。

2つめは「社会に出るために必要な力を身につける

こと」というテーマでの個別レポートの作成。これには「①自身がプロジェクトを通じて学んだこと」と「②これから伸ばしていかなければならないと思うこと」について自由に記載してもらった。

## Ⅲ. 学生企画講座の概要

学生が企画運営した4つの講座は、表2のとおりである。テーマも違うが、講座のスタイルも、講義形式、子ども対象、実演試食付、料理教室など、それぞれ個性の違う多彩なものとなった。

詳細については、各講座のチラシと学生がまとめたレポートを参照されたい。(図2～図13)

表2 学生企画講座一覧

<p><b>食品ロスを減らすため 私たちが今できること</b></p> <p>2018.12.12. 水 16:40-18:10 追手門学院大学 2311 教室 対象：学生，教職員 メンバー：経営学部3 回生 男子1名 社会学部2 回生 男子1名 心理学部2 回生 男子1名</p>
<p><b>親子で食べものはかせ！</b></p> <p>2018.12.15. 土 14:00-14:45 安威公民館 対象：親子（園児・小学生） メンバー：経営学部2 回生 女子4名</p>
<p><b>実演付き講座 魔法のスープ</b></p> <p>2018.12.17. 月 15:30-16:30 追手門学院大学 食堂2 階 対象：学生，教職員 メンバー：経営学部3 回生 女子2名 経済学部3 回生 女子1名</p>
<p><b>サルベージパーティー（料理教室）</b></p> <p>2019.1.6. 日 11:00-14:00 茨木市男女共生センターローズ WAM 対象：学生，一般 メンバー：社会学部2 回生 女子2名 地域創造学部2 回生 女子3名</p>

余った食べ物を、必要な人たちへ。



「食へられる」のに「捨てられて」  
買いたたき、販売期限を過ぎたもの、ラ  
ベルの赤字ミスなど、「安全に食べられる」  
多くの食品が廃棄されているのです。  
しかし私たちが「安全に食べられる」  
「できること」や「変えられること」が、たくさん  
あります。  
フードバンク関西の活動から、食品ロスにつ  
いて一緒に考えてみませんか？

**食品ロス**を  
**減らすため**  
**私たちが今**  
**できること**  
**フードバンク関西の**  
**活動に学ぶ**

参加費 無料

講師 浅葉 めぐみ 氏  
(フードバンク関西 理事長)

■フードバンク関西とは  
企業などから寄贈された食品を、  
支援を必要とする人たちを支える  
福祉施設や団体に、無償で分配す  
る事業を行う。現在、受け取り団  
体は100を超えており、子ども食  
堂への食品提供も実施。

日程 2018年12月12日(水)  
5限 16:40~18:10

場所 追手門学院大学 2311教室 (2号館3階)

定員 60名 (先着順/対象：学生・教職員)

【お申し込み方法】タイトルを「食品ロス講座」として、氏名、学籍番号を記載の上  
sejuku@otemon.ac.jp までメールをお送り下さい。

主催：追手門学院大学 プロジェクト2A (学生チーム) 協力：成熟社会研究所

図2 講座チラシ「食品ロスを減らすため私たちが今できること」

親子で参加できる講座 //

**親子で食べものはかせ!**

参加費 無料! ... 好き嫌いをなくして ... 元気になろう!

2018年12月15日(土)  
14:00~14:45

かしこくなるもん! ... なんでもたべるもん!

・紙芝居で、野菜を食べることの大切さを学ぼう  
・三色食品群のクイズをしよう

野菜嫌いな子どもでも食べられる野菜ドーナツの試食もご用意しています!

お土産 苺

会場 安威公民館  
茨木市安威2-16-12 2F 和室

駐車場・駐輪スペースは限られているため、徒歩またはバスでお越しください。  
(阪急バス、塚原口より徒歩5分)

お申し込み・お問い合わせ先 / 先着20組 /

otemon.oyako.project@gmail.com

メールアドレスを入力、もしくはこちらのQRコードを読み込んで「メール作成画面はこちら」へ

メールの本文にて、人数・申込者氏名・お子様の氏名・所属(小学校)・電話番号をご記載ください。

※個人情報はこの講座以外に使用することはありません

対象年齢：3才~小学校低学年  
・保護者同伴でお越しください。

追手門学院大学  
プロジェクト2A 企業・地域との講座企画プロジェクト  
Supported by 成熟社会研究所

締め切り日：12月12日

図3 講座チラシ「親子で食べものはかせ!」

参加者募集

実演付き講座

**魔法のスープ**

～美肌・ダイエット・免疫力向上～

捨てている野菜の皮や種こそ最も栄養のある部分。野菜まるごと使って、より栄養の高い一品を!

野菜の皮から作る出汁(ベジブロス)の講座です。栄養価は野菜ジュースの約100倍!?一緒に野菜に関する知識を深めましょう。ミネストローネの試食もできちゃいます!

講師 野聖いづみ 氏  
料理研究家  
上級食育アドバイザー

日時 2018年12月17日(月)  
15:30~16:30

場所 本学 食堂2階

参加費: 無料

対象者: 学生(他大学も可)

お申し込み方法  
左側のQRコードを読み込み、お申込みフォームに必要事項を記入してください。

お問い合わせ先: otemon.yasai123@gmail.com

主催: 追手門学院大学 プロジェクト2A  
協力: 成熟社会研究所 締め切り: 12月15日

図4 講座チラシ「実演付き講座 魔法のスープ」

**Salvage Party**

サルベージパーティーとは、家で持てあましている食材を持ち寄り、みんなで料理を作ってそこから、賞品の抽選も行う。使い切りや、無駄の少ない料理ができるかも?!

お歳暮でいただいたもの、お正月の余りものありませんか?

講師 料理研究家  
吉野 健一 氏

日時 2019/01/06(日)  
11:00~14:00

場所 ローズWAM 3階 料理工房  
〒567-0882 大阪府茨木市元町4-7

参加対象 (定員 20名)  
料理に関心のある方、レシピを増やしたい方、親子で料理を楽しみたい方など誰でも参加可能

持ち物 エプロン、余っている食材最低2つ  
※賞味消費期限の過ぎているもの、開封済みの加工食品はお持ちいただけません。

お申し込み方法  
電話 072-665-5068  
メールアドレス salvage.ogu.project@gmail.com  
お申し込みはお電話、メールどちらでも可能です。  
応募期間 12/17~1/4  
※お申し込みの際、代表者氏名、人数、ご連絡先、お持ちいただく予定の食材をお伝えください。

参加費 無料!!

主催 追手門学院大学プロジェクト2A

図5 講座チラシ「サルベージパーティー」

## 講座タイトル「食品ロスを減らすため 私たちが今できること」

日時	12月12日(水) 5限 16:40~18:10
場所	2311 教室
参加人数	33人
費用	講師派遣 31000円 参考書籍 2700円 チラシコピー代 600円 合計 34300円
目的	日本では646万トンもの食品が、捨てられている。食品ロスを減らすために活動している(フードバンク関西)理事長の浅葉めぐみ様による講演を行うことで、食品ロスの現状と課題に興味を持ってもらおうと考えた。
講座の概要	講師の浅葉めぐみ様による講演(60分)を行った後、グループワークによる意見交換と質疑(30分)を実施した。
講演の内容	①日本の食糧廃棄事情と、多くの食品がまだ食べられるにもかかわらず、200万トン~400万トンも廃棄されている。廃棄食品総量3000万トンのうち、26%は捨てられている。 ②食品ロスに対してフードバンク関西は、食品関連企業と福祉施設の橋渡しを行っている。 ③フードバンク関西にも資金調達も大変であるという現状「食べ物は命の糧、大切にしたい」というフードバンクの思い。

### (動機)

食品ロスについて授業で学んだことをきっかけに、実際に食品ロスを減らす活動をしている人に話を聞きたい、さらにこの問題を多くの人に知ってもらいたいという思いから講座を企画した。

### (社会的意義)

フードバンク関西は、食品ロスによって苦しんでいる子供たちを救済し、フードバンク関西によって多くの子供たちが助けられていることが分かった。社会的意義はとてもあった講座であると感じた。

### (良かった点)

講座がすべて終了したとき、浅葉様に「よい講座だった」といっていただいたのが印象に残った。また、「多くの発表者の意見もよかった」とおっしゃられた。私たちも食品ロスについての知識が高まり、私たちにとっても良い講座になったと感じた。またフードバンク関西が食品を大切にしていることと、浅葉様の食品への熱意を感じることができた。

授業とあわせて開講したことで多くの人に集まってもらえた。これからを生きる私たち若者に食品ロスのことを改めて感じさせてくれる講座で、意見交換の場を設けられたことはとてもよかったと感じた。

**(悪かった点)**

グループメンバーの集まりが悪く、準備に日程ぎりぎりまでかかってしまい、時間が詰め込みになってしまったこと。

また、浅葉様へのメールの書き方や、ポスターの張り出し方などに多くの問題があったことを反省している。

自分たちが作り上げた講座であるにもかかわらず多くの先生方にお手数をおかけしてしまった。講義中寝ている人もいたので、飽きさせない工夫をするべきだった。

**(当日／講座開催までの流れ)****1. 講座準備**

看板作り ポスター貼り等

**2. 設営**

チラシ ポスターを黒板に貼る。机を並べる。

**3. 配布資料整理 資料確認後設置****4. 予行演習 時間通り進められるかの確認をした。****5. 講師・浅葉様の到着、対応****6. 講師との打合せ、最終確認**

挨拶して、なぜこの講座企画を考えたかを話した。

浅葉様には1時間ほど話してもらえることを再確認した。

そのあとグループで話し合いを行う。発表することを再確認した。



写真 講座風景

**(最後に)**

協力していただいたフードバンク関西・理事長の浅葉様には、とても良い、食品ロスの講演をしていただきました。私たちにご尽力いただいた教職員の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

## 「親子で食べものはかせ！」

### 〈概要〉

日時：2018年12月15日 14:00～14:30（当初予定の14:45より早めに終了）

場所：安威公民館（茨木市安威2-16-12）

対象：3才～小学校低学年（保護者同伴）

内容：アイスブレイクタイム、野菜ドーナツの試食、紙芝居、パネルクイズ、  
野菜ドーナツのお土産・野菜を使った料理のレシピ配付

### 経費

品目	金額
会場使用料	1,000
チラシコピー代@20×200	4,000
食材費（野菜等）	1,477
雑費（マジックテープ・紙コップ等）	648

### 〈動機〉

プロジェクトの授業で、食品ロスの多くは家庭から発生しているということを学んだ。

その原因のひとつは、子どもによる好き嫌いや食べ残しである。また、食習慣や食生活は子どもの頃から形成される。そのため、微力ではあるが私たちが何か出来ないかを考え、子どもに食の大切さをわかってもらおうというテーマで講座を開いた。

### 〈社会的意義〉

子どもの約6割に、野菜の好き嫌いがある。食べ物の栄養や正しい食事バランスを教える。そして、苦手な食べ物も食べる意味を理解してもらい、好き嫌いによる食べ残しを減らす。結果的に食品ロスを減らすことにも繋がる。

### 〈期待した効果〉

食べ物を好き嫌いせず、残さず食べることの大切さを伝える。その上で、三色食品群の分類を覚えてもらい、三色の食材をバランス良く食べることによって得る効果を理解してもらう。

バランス良く食べることによって病気になりにくくなったり、体の成長に繋がったりするということを理解してもらい、これから先、意識して食事をしてもらう。

### 〈結果〉

食の大切さを口で説明するだけでなく、紙芝居で伝えるという方法を取ったため、子ども達は頭に入りやすかったのではないかと。実際に、その次のパネルクイズでは、どの食材が何色に分類されるかを迷わずに当てることが出来ていた。また、野菜のドーナツを試食してもらうことにより、野菜は美味しく食べることが出来るということを知ってもらえた。

## 〈準備期間〉

## ・当日まで

紙芝居：1週間 パネルクイズ：3週間 レシピ作成：1日間 広報：約1ヶ月

## ・当日

買い出し：30分 調理：1時間 広報：20分



## 〈反省点〉

当日までの広報が甘く、申込者は一組しかいなかった。幼稚園にチラシを置いてもらうだけだったため、自ら保護者に説明し、チラシを配布する必要があるがあった。普段の公民館の利用者数も調査するなどして公民館にもチラシを貼るべきだった。

当日の広報では、晴れてはいたが寒かったこともあり外出している人が少なく、手こずってしまった。結果的には3組の方が参加してくださったが、準備期間が多くあった割には人を集められなかった。また、講座の予定時間が45分間であったが、30分間で終わってしまった。流れを決めておくだけでなく、当日までに模擬講座を実践しておくべきだった。

## 〈良かった点〉

メインの対象は子どもなので、いかに子どもに楽しんでもらいつつ勉強になるかを考え、工夫した。

紙芝居では、子どもが楽しめるようなイラストを描き、内容は三色食品群の三色を「レンジャー」で例えるなどして子どもの頭に入りやすいようなものにした。

パネルクイズでは、子どもが持ちたくなるような大きさとデザインにし、自ら貼って行って覚えられるような仕組みにした。最後にもう一度確認をしたところちゃんと覚えてくれていたので、時間をかけた甲斐があった。

また、パネルクイズの制作は、成熟社会研究所の余りのパネルや、メンバーのアルバイト先の余りのダンボールを使用したため、制作費用は安く済ますことが出来た。



紙芝居の様子



パネルクイズの様子

小学3年生の参加者の子たちは、学校で食についての勉強をあまりしないと言っていたため、良い機会になったのではないかと。

次回また講座をする機会があれば、食事をするのは自らの健康に繋がるということにプラスして、食べ物を残さず食べることで、ゴミを減らすことが出来るということも伝えたい。

## 魔法のスープ

### ●講座概要

日時：12月17日（月） 15:30~16:30

リハーサル 12月5日（水）16:40~19:45

場所：追手門学院大学

食堂2階コンベンションルーム

参加費：無料

対象者：学生（他大学も可）

経費：約4000円 内訳：食品・本・顆粒だし・  
消耗品（リハーサルを含む）

講座内容：実演付き講座（試食試飲あり）

- ① ベジブロスってなあに？
- ② どうやって作るの？
- ③ どんな味なの？（試飲）
- ④ 誰が考案・命名したの？
- ⑤ どんな風に使うの？（試食）

### ●動機

食品ロスに関心があり、その中でも野菜に着目して考えた。野菜には皮や種など、当たり前前に捨てている部分が多いが、捨てている部分にこそ多くの栄養があることを知った。そこで、野菜の皮や種を有効に活用できないかと考えたとき、ベジブロスという記事が目にとまった。丹精込めて栽培された有機野菜を、葉っぱから根っこまでまるごと使いたいと思った。このベジブロスを使用することで、普段よりも栄養価の高い料理を作ることが可能である。健康は食べ物だけでなく、暮らし方や環境まで考えることが大切である。

### ●社会的意義

人々の健康意識を高めて、捨ててしまう部分を有効活用し、野菜の存在価値を高める。

### ●期待した効果

特別な何かを使う必要はなく、誰もが手にして捨ててしまうもので作れるため、どんな人でも実践できる。そして、免疫力を高める効果も医学的に証明されてきている。

人々の健康意識が高まっていながら、野菜の摂取量が低下している今こそ、多くの人に実践してもらいたい。

### ●プロジェクト結果

参加人数は5名で、講座は無事に時間内に終了した。野菜の持つ栄養価とその効果、また野菜本来の味を知ってもらえた。参加者からは「実際に家で作ってみようと思う」という声もあって、講座を開講する目的は達成できたと思う。試食に用意したベジブロスを使用したミネストローネも好評で、人数に対して作りすぎたかもしれないと思ったが、完食することができた。

### ◎良かった点

本番を想定したリハーサルを行った。このおかげで、下準備の大変さを知り、いかにして当日の負担を減らすかを考えた。また、リハーサルでは一方的に話すだけの講座だったが、本番では実際に調理中の様子を見てもらい、飽きさせないよう工夫した。さらに、少レクイズを入れることで、参加者とのコミュニケーションも取ることができた。

広報に関しては、人の目を引くカラフルなポスターを作成した。そして、短い時間で手軽に申し込みできるようにQRコードの作成も行った。講座の最後には、自宅でも実践できるように、参加特典として、ベジブロスを使った料理のレシピを配布した。

さらに、ベジブロスの考案者であるタカコナカムラ氏と、講座についてメールでアポイントメントを取り、講座が終了した際には、講座の写真を送り、そのときの様子を報告した。これを受けて、私たちの活動をホールフード協会の

会報誌に使用したいとおっしゃってくださいました。

#### ◎悪かった点

参加人数が少なかったことから、広報活動に問題があったとわかる。掲示できる場所にはほぼすべて掲示していた。授業内でもポスターを配布したが、受講者が1, 2年生だったため、講座当日は授業の関係で人が集まらなかったのだろう。空き時間を有効活用できる、と考えた結果だったので、配布相手は比較的時間に余裕がある3, 4年生を重点的にするべきだった。また、試食用のミネストローネを作りながら講座を進めていたが、料理ができる前にパワーポイントを使用した講座の本編が終わってしまった。時間を余らせてしまったが、メンバーの機転で自己紹介を行い、なんとか乗り越えた。今後は、より時間の使い方について考えていかなければいけない。

※ベジブロスとは、ベジタブル（野菜）＋ブロス（だし）の略称である。ベジブロスは普段捨ててしまっている野菜の皮や種などの出汁のことである。



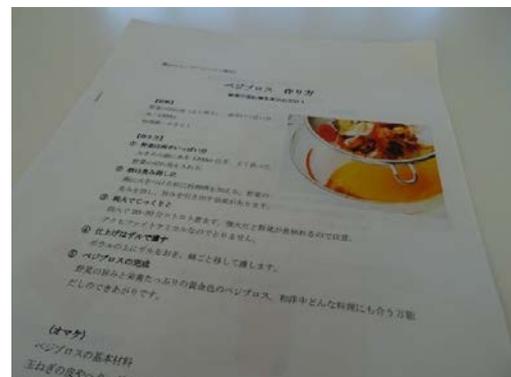
リハーサルの様子



調理中の様子を見る参加者



左：野菜の出し殻 右：ミネストローネ



参加特典のレシピ



## サルベージパーティー

### <概要>

日時；2019年1月6日（日） 場所；ローズWAM 料理工房

内容；料理教室

### <経費>

謝金（交通費込み）	¥50,720
会場使用料（料理工房）	¥4,400
会場使用料（会議室）	¥650
参考書籍	¥1,521
チラシコピー代	¥1,000
合計	¥58,291

### <動機>

授業を通して1番関心の高かった「食品ロス」について、自分たちで何ができるかを考え、サルベージパーティーという活動を知った。これなら私たちにもできるのではないかと思ひ企画することとなった。

### <担当>

名前	担当
学生A	リーダー、広報（学内）
学生B	連絡係、ポスター制作
学生C	講師との連絡係
学生D	広報（学外）
学生E	広報（学内、学外）

### <準備期間>

- ・当日まで  
ポスター1週間、広報活動1週間、打ち合わせ1時間程度
- ・当日  
準備2時間、調理1時間半、試食1時間、片付け30分

### <サルベージパーティー本番>

参加人数 8名、集まった食材 33品目



図12 講座レポート「サルベージパーティー」①

#### ・献立

トマトの麻婆餅、ツナの Pasta サラダ、みかんの入った白菜うま煮、蕪入りチーズいもち、炊き込みご飯、みそ汁、みかんとリンゴのヨーグルト和え

講座の主な進行は高橋が担当し、まず吉野さんの紹介と吉野さんからの食品ロスの現状に関する講義、次に実際に調理をし、最後に試食・片付けという流れで行った。来てくれた参加者からは「楽しかった」や「普段料理しないので良い経験になった」といった声があった。



↑サルベージパーティーの様子

#### <よかった点>

1人1人が責任を持って動いてくれたこと、みんなで楽しく行えて成功できたこと、講師の吉野さんと連携が取れたことである。

#### <反省点>

宣伝するのが遅くなったこと、連絡がギリギリになってしまったこと、もっと仕事をうまく分担すればよかったということである。また、他のグループの講座よりかなり経費が高くなってしまったのも反省点である。

#### <学んだこと>



今回、講座を企画してみて1から何かを創り出すことや、人を集めることの大変さを痛感した。一方で、企画した講座が成功したときの達成感も味わうことができた。「食」というテーマではあったが、その枠を超えて「食」以外の知識も得ることができるとても良い経験となった。

後日、この講座の様子は日高新聞という新聞に掲載された。

←日高新聞の記事

#### IV. プロジェクトの成果と今後の課題

2-7に記した2種のふりかえりレポートの内容から、このプロジェクトの成果と課題を考えたい。

また、プロジェクトから派生して連携教育事業につながった事例を紹介する。

##### 4-1. 自己評価およびメンバー評価より

講座に関する具体的な反省点で大きいのは、広報面であった。これは前年度のプロジェクトと同様である。社会一般のイベントなどでは遅くとも1ヶ月前には告知を行い（実際は数ヶ月前からが当たりまえ）、告知先や媒体も多様に工夫をこらしてようやく人が集まる、というのが常識だが、学生側は1週間～10日もあれば何とかなる、チラシを置いてもらったから大丈夫だろう、という感覚で、広報を甘く考えていた。

学生の講座レポートには、広報が遅れたため参加者の確保に苦労した点が複数記載されている。（図9、図11、図13参照）

個別評価に関しては、教職員側から見て、自発的に動いている、努力している、と思えた学生は、評価表における自己評価や他己評価も高いものとなっていることが多い。

一方でメンバーからは「力不足なことは特でない」「完璧だった」と、高い評価を得ているものの、自分自身にはかなり厳しい評価点をつけている学生も数名いた。

また、こちらからは見えない部分で、作業負担がある特定の学生に偏っていた事実もあり、学生間で適切な作業分担を行うことの難しさを感じる。

リーダーとして活躍した学生らには、「リーダーとしてよく動いてくれていた」という高評価もある一方、「もっと指示を出してくれたらよかった」「他のメンバーをもっと頼ってほしかった」という意見もあった。

その他、メンバーに遠慮して自分がやりたい仕事を言い出せなかった学生もいたことが読み取れた。

メンバー間でほとんど連携をとれていなかったグループでは、相手への評価についての記述が極端に少なく、お互いのことをちゃんと見ていなかったのであろうと推察できる。

いずれにしてもメンバー同士の連携が不足していたことは否めない。グループ活動の楽しさや、一人では出来ない何かを生み出す面白さを学生が体感するため

にも、教職員側の適切なサポートや、連帯感の生まれるプログラム構成など、様々な工夫が必要といえる。

##### 4-2. 個別レポートより

「社会に出るために必要な力を身につけること」というテーマで書いた個別レポートには、自身が学んだことと、これから身につける力として、次のような単語が記載されている。

「チームワークの大切さ」「チームで連携する難しさ」「ポスター等のデザイン力」「ビジネスマナー」「スケジューリング（計画性）」「語彙力・文章力」「自ら動く力（主体性）」「企画を実現する難しさ」「想定力（先のことを考える）」「振り返りをする事」「役割分担」

今回、学生は、できなかったことや対応ミスなどマイナス面も多々経験した。しかし、個別レポートに並ぶ言葉を見ると、それらの負の部分も含めて、グループで活動することの意義や難しさ、そして自分が担える役割は何かという気付きなどを、ある程度伝えることが出来たのではないかと思う。

##### 4-3. 幼稚園での出前講座への発展

授業期間が終わった後、子ども向けの講座「親子で食べものはかせ！」については、当学院の系列である追手門学院幼稚園への食育出前講座を行った。

系列幼稚園があることと、学生手作りの講座道具（紙芝居やクイズパネル）のお披露目の場を1回きりにするのは惜しいということもあり、幼稚園の連携協力のもと実現したものである。

##### ■食育出前講座の概要

日時：2019年2月27日（水）10:10～11:45

場所：追手門学院幼稚園

対象：年少クラス×4（各クラス30人）

※各回20分を4クラス巡回して行った

実施にあたっては、元の脚本を年少の子ども向けに分かりやすく改訂し、臨んだ。子どもたちの反応は上々で、学生メンバーらも、よい経験になったと楽しんで取り組んでいた。

こういった外部への広がりや発展があったことは、このプロジェクトの一つの成果といえる。



写真2 幼稚園での出前講座（2019.2.27 筆者撮影）

#### 4.4. 今後に向けて

プロジェクトの研究的背景には「論理思考育成トライアル」という一面もあるのだが、2年に及ぶプロジェクト科目の実践を通じて分かったことがいくつかある。

まず、論理的思考を育成するために多用したワークシートや思考ツールが、授業外での応用にはほとんど結びつかなかったことである。特に前年度は様々な形式のワークシートを活用してグループワークや個人ワークを促したが、授業内でのワークでは役に立つものの、それを別の場面で生かして使うというところまでつなげることはできなかった。

前年の反省を生かして2018年度はなるべくシンプルなシートやツールのみにして、それらを使う意図も併せて伝えるようには努めたが、やはり授業が終わると学生の頭の中からはシートやツールの存在は抜け落ちてしまっている感があった。

また、本プロジェクトのような内容の場合、マニュアル化（プログラム化）は難しいということも実感し

た。「講座を企画運営する」という一連の流れを通じて、学生には主体性、思考力や社会人基礎力を付けてもらえればと考えていたが、実際に授業を進めると、プラン通りには流れていかないことが各所で生じ、その度に大小の軌道修正・プログラム変更を行った。特にグループでの作業力や成長度合いは差が大きく、各グループ別に細やかなケアや指導が必要となった。これはもちろん履修生個々の能力差や性格の違い、あるいはリーダー格の学生やキーになるような学生がいるかどうかなどが影響しているが、根本的な基礎力が身につけていない学生も多いのでは、と実感させられた。

学生の積極性のスイッチもなかなか入らず、グループの講座テーマが決まっても、詳細がいつまでも決まらず企画がブラッシュアップされないグループもあった。一方、主体的に考え動くグループでは、各自が趣旨と目的を理解し、自分ごととして考え、グループでの自分の役割も認識できていたように思う。今後あらゆる場面で何らかの「テーマ」や「課題」を見出し、それに取り組む際、いかに「自分ごと」に出来るかどうかは重要な要素の一つといえる。

2015年度に実施したトライアル講座から始まったプロジェクト科目は、学ぶ側・教える側のアクティブラーニングの課題を浮き彫りにし、一定の役割を果たしたといえるだろう。（トライアル講座については成熟社会研究所紀要第1号に掲載された『サバイバルカレッジ「知恵の環」の取組み』（神谷・神吉，2017）を参照していただきたい）

これら得られた成果や課題は、現在成熟社会研究所で取り組んでいる論理思考育成のためのハンドブック作成を中心とするプロジェクトにつながっている。



## プロジェクトレポート

## 参加型研究会シェアラボ「私の仕事」シリーズを振り返る

—シェアラボ第4期・第5期 講演録より—

中 川 啓 子

## I. はじめに：シェアラボとは

成熟社会研究所が主催している「シェアラボ」とは、その名前の通り「シェア=分けあう」「ラボ=研究(所)」である。テーマについて、世代や分野を問わず多様な人々(学生, 教職員, 一般参加者)が学び、対話し、分かち合い、新しい発見と気づきを得ることを目的とした参加型研究会となっている。

学内外からゲスト講師を迎え、講師による講演あるいは対談とミニワークショップ(感想や質疑をグループワークで議論)を組み合わせたものが基本プログラムとなっており、研究所が設立した2014年度からスタートし、これまでの開催回数は通算19回である。

1回あたりの参加者は、学生を中心に20名前後から、多い時は40名を越えた。

各回の概要は表1に、チラシは図1～7に示すとおりであるが、第1期(2014年7月～2015年6月, 5回開催)は「動詞」シリーズ、第2期(2015年9

月～2015年11月, 3回開催)は「ととのえる」シリーズ、第3期(2016年5月～12月, 4回開催)は「とびこめ, 未知へ!」と、期ごとに変化をつけてきた。

開催を続ける中、第3期において「多様な働き方」への学生の関心が非常に高いことを感じ、第4期(2017年6月～12月, 4回開催)と第5期(2018年7月～12月, 3回開催)はともに年間テーマを「私の仕事」とした。普段学生が出会わないような職種や働き方のゲストを招いて対談とワークショップを実施し、参加した学生からは好反応を得られた。なお対談は「社会的企業家編」を除き研究所の神吉直人副所長が担当した。

この「私の仕事」シリーズでの対談や質疑には、「働くこと」「生きること」への様々なメッセージや、学生に大切にしてほしいエッセンスが含まれていた。

本レポートは、2年に渡る「私の仕事」シリーズを振り返りながら、その講演録から抜粋した発言を分類・整理し、掲載するものである。

表1 シェアラボ開催概要(全19回) ●神吉直人氏との対談 ■佐藤友美子氏との対談

期	開催日	回	タイトル	ゲスト講師
第1期	1 2014. 7. 3. 木	Vol. 1	うごく	土井勉氏(京都大学) 安村克己氏(追手門学院大学)
	2 2014. 10. 9. 木	Vol. 2	まなぶ	柵富雄氏(富山インターネット市民塾) 今堀洋子氏(追手門学院大学)
	3 2014. 12. 4. 木	Vol. 3	あきなう	奥村聡氏(事業承継コンサルタント) ●
	4 2015. 2. 25. 水	Vol. 4	すまう	谷直樹氏(大阪くらしの今昔館) 加茂みどり氏(大阪ガス)
	5 2015. 6. 18. 木	Vol. 5	つたえる	市村元氏(「地方の時代」映像祭プロデューサー)
第2期	6 2015. 9. 17. 木	Vol. 1	からだをととのえる	平尾剛氏(神戸親和女子大学・元ラグビー日本代表) ●
	7 2015. 10. 22. 木	Vol. 2	くらしをととのえる	モモの家クリエイティブのみなさん+今堀洋子氏
	8 2015. 11. 26. 木	Vol. 3	きもちをととのえる	金政祐司氏(追手門学院大学) ●
第3期	9 2016. 5. 23. 月	Vol. 1	山伏, 来る!	星野文紘氏(山伏・大聖坊十三代目) ●
	10 2016. 7. 7. 木	Vol. 2	海外, 行っとく?	湯川カナ氏(「生きる知恵と力を高める」リベルタ学舎) ●
	11 2016. 10. 13. 木	Vol. 3	仕事って, 何だ?	青木真兵氏(人文系私設図書館ルチャ・リブロ) ●
	12 2016. 12. 8. 木	Vol. 4	あなたの中の光と闇	荒井崇史氏(追手門学院大学) ●
第4期	13 2017. 6. 1. 木	Vol. 1	中小企業編	新居未希氏(ミシマ社) ●
	14 2017. 7. 20. 木	Vol. 2	工場長編	武藤北斗氏(パプアニューギニア海産) ●
	15 2017. 10. 19. 木	Vol. 3	革職人編	田村光啓氏(田村製作所) ●
	16 2017. 12. 5. 火	Vol. 4	ゲストハウス編	朴徹雄氏(ゲストハウス萬家) ●
第5期	17 2018. 7. 2. 月	Vol. 1	社会的企業家編	岡本工介氏(タウンスペース WAKWAK) ■
	18 2018. 11. 15. 木	Vol. 2	フリーランス編	甲斐祐子氏(司会者・朗読家) ●
	19 2018. 12. 6. 木	Vol. 3	金融業編	藤原明氏(りそな総合研究所) ●

**シェア**  
SHARE LAB.  
追手門学院大学  
成熟社会研究所  
第4期  
私の仕事。  
vol.1  
**中小企業編**

2017年  
**6月1日(木)**  
16:40~18:40  
参加費：無料(定員40名)  
会場：追手門学院大学 会議室5(1号館3階)  
大阪府茨木市西宮橋 2-1-15  
(JR 茨木駅、阪急茨木駅から徒歩15分(20~30分))

参加者募集中!

日本の企業の  
99%は中小企業!

神吉直人先生「小さな会社でほくは育つ」  
出版記念企画!!

16:40~ミニワークショップ  
17:00~ゲスト対談&質疑  
18:00~グループワーク

途中からの参加もOK!

ゲストスピーカー  
**新居 未希氏** (あらい みき)  
株式会社ミシマ社  
編集担当

**神吉直人氏** (かんき なおと)  
追手門学院大学准教授  
成熟社会研究所副所長

お申し込みはコチラまで!  
主催：成熟社会研究所 (担当：中川)  
TEL: 072-665-5068  
sejuku@otemon.ac.jp

シェアラボは、いろんな世代や分野の人が集まって「学び」「対話」「分かち合う」気分でオープンな研究会。学生・教職員・一般、誰でも参加できます!

ドリンクついでです!

<https://www.facebook.com/otemon.sejuku>

図1 4期 vol.1「中小企業」編チラシ

**シェア**  
SHARE LAB.  
追手門学院大学  
成熟社会研究所  
第4期  
私の仕事。  
vol.2  
**工場長編**

2017年  
**7月20日(木)**  
16:40~18:40  
参加費：無料(定員40名)  
会場：追手門学院大学 会議室5(1号館3階)  
大阪府茨木市西宮橋 2-1-15  
(JR 茨木駅、阪急茨木駅から徒歩15分(20~30分))

参加者募集中!

途中からの参加もOK!

16:40~ミニワークショップ  
17:00~ゲスト対談&質疑  
18:00~グループワーク

大阪府中央卸売市場にある天然エビの工場。工場長の生産者としてのこだわり。そして新しい働き方への挑戦!

ゲストスピーカー  
**武藤 北斗氏** (むとう ぼくと)  
パプアニューギニア海産工場長  
オガエックショップ TAYUCCO 店長

**神吉直人氏** (かんき なおと)  
追手門学院大学准教授  
成熟社会研究所副所長

お申し込みはコチラまで!  
主催：成熟社会研究所 (担当：中川)  
TEL: 072-665-5068  
sejuku@otemon.ac.jp

シェアラボは、いろんな世代や分野の人が集まって「学び」「対話」「分かち合う」気分でオープンな研究会。学生・教職員・一般、誰でも参加できます!

ドリンクついでです!

<https://www.facebook.com/otemon.sejuku>

図2 4期 vol.2「工場長」編チラシ

**シェア**  
SHARE LAB.  
追手門学院大学  
成熟社会研究所  
第4期テーマ  
私の仕事。  
vol.3  
**革職人編**

2017年  
**10月19日(木)**  
16:40~18:40  
参加費：無料(定員40名)  
会場：追手門学院大学 会議室5(1号館3階)  
大阪府茨木市西宮橋 2-1-15  
(JR 茨木駅、阪急茨木駅から徒歩15分(20~30分))

参加者募集中!

途中からの参加もOK!

16:40~ミニワークショップ  
17:00~ゲスト対談&質疑  
18:00~グループワーク

本物の素材。厳選な加工。革に込められたこだわりと信念。  
**職人世界のリアルを聞く!**

ゲストスピーカー  
**田村 光啓氏** (たむら みつひろ)  
株式会社田村製作所

**神吉直人氏** (かんき なおと)  
追手門学院大学成熟社会研究所

お申し込みはコチラまで!  
主催：成熟社会研究所 (担当：中川)  
TEL: 072-665-5068  
sejuku@otemon.ac.jp

シェアラボは、いろんな世代や分野の人が集まって「学び」「対話」「分かち合う」気分でオープンな研究会。学生・教職員・一般、誰でも参加できます!

ドリンクついでです!

<https://www.facebook.com/otemon.sejuku>

図3 4期 vol.3「革職人」編チラシ

**シェア**  
SHARE LAB.  
追手門学院大学  
成熟社会研究所  
第4期テーマ  
私の仕事。  
vol.4  
**ゲストハウス編**

2017年  
**12月5日(火)**  
17:00~19:00  
参加費：無料(定員40名)  
会場：追手門学院大学 3204教室(3号館2階)  
大阪府茨木市西宮橋 2-1-15  
(JR 茨木駅、阪急茨木駅から徒歩15分(20~30分))

参加者募集中!

途中からの参加もOK!

17:00~ミニワークショップ  
17:20~ゲスト対談&質疑  
18:20~グループワーク

~世界の旅人と地域をつなぐ~  
**「地元いちばん近いゲストハウス」を神戸・灘区にオープンするまで。**

ゲストスピーカー  
**朴 徹雄氏** (ハク チョロン)  
ゲストハウス萬家オーナー

**神吉直人氏** (カキキ ナオト)  
追手門学院大学成熟社会研究所

お申し込みはコチラまで!  
主催：成熟社会研究所 (担当：中川)  
TEL: 072-665-5068  
sejuku@otemon.ac.jp

シェアラボは、いろんな世代や分野の人が集まって「学び」「対話」「分かち合う」気分でオープンな研究会。学生・教職員・一般、誰でも参加できます!

ドリンクついでです!

<https://www.facebook.com/otemon.sejuku>

図4 4期 vol.4「ゲストハウス」編チラシ



## II. 「私の仕事」各回の概要

まずは、「私の仕事」を年間テーマとした7回のシェアラボのゲスト講師を簡単に紹介し、各回の学生へのメッセージ意図などを説明したい。

### 2-1. 中小企業編：新居未希氏

出版社であるミシマ社に所属する新居氏は、成熟社会研究所の神吉直人副所長が執筆した『小さな会社でほくは育つ』（2017.1 インプレス発行、ミシマ社編集）出版にあたって編集を担当された。この書籍は、中小企業をテーマとしており、対談のテーマも「中小企業（ミシマ社も含め）」と「編集という仕事」という2つの切り口を用いた。

ミシマ社自体、ユニークな書籍を多数出版されている、いい意味で大変面白い中小企業であるのだが、「大手企業への就職がベスト」とも思われがちな現在の学生の就職事情に対し、中小企業の良さ、面白さ、何が学べるのか、などを考える機会としたいと思った。



写真1 新居未希氏（筆者撮影）

### 2-2. 工場長編：武藤北斗氏

大阪府中央卸売市場（茨木市）には武藤氏が工場長を勤める天然エビ加工工場、パプアニューギニア海産がある。工場は元々石巻市にあったが、2011年の東日本大震災の津波で流され、福島原発事故の影響も考え、大阪に移住された。

この工場で武藤氏が導入しているのが、新しい働き方「フリースケジュール」である。

働くパートの方は、好きな日時に出勤し、好きな日に休め、そのことを事前に連絡する必要が一切無いという、普通に考えるとスムーズに運用できるとは信じ難い制度だ。しかし試行錯誤やパートの方との話し合いや調整を繰り返し、たどり着いたこのルールは、

ちゃんと運用され、働きやすさにつながり、結果的に会社に利益をもたらしている。武藤氏の話をもつて、これまで当たり前としてきた「働き方」の概念が覆り、新しい生き方へ視点や社会への考えを持てるのではと考えた。



写真2 武藤北斗氏（筆者撮影）

### 2-3. 革職人編：田村光啓氏

革を加工して鞆やパスケースなどを製作している田村氏は、鞆メーカー勤務を経て独立し、OEM業務（他社ブランドの製品を製造すること）をスタート、2015年からは自身のオリジナルライン「TAMURA」を立ち上げ、革製品を製作販売している。

鮮やかな色使いと、丁寧な仕上がり特徴のTAMURAの製品は、使い手のことを考えたこだわりが随所に見られる。「職人」編であり、「自営業」編でもあるこの回では、縁遠い世界のように実は身近な職人世界と、そのこだわりや真髄、そして「本物」というものに、学生に触れてもらいたいと考えた。



写真3 田村光啓氏（筆者撮影）

### 2-4. ゲストハウス編：朴徹雄氏

韓国生まれの朴氏は、ワーキングホリデーで来日した後、東京の老舗ゲストハウスでの修行を経て、神戸でゲストハウスを開業した。

開業までの道のりは山あり谷ありだが、地域の人とつながり、地域の人に助けられ、多くの仲間とともに空き家を改装して「ゲストハウス萬家」を作り上げている。開業後も、ゲストハウスが世界の人が地域につながる場所となるように、地元を巡るツアーの開催など工夫を凝らした企画を発信している。

異国の地での挑戦が見事に実を結ぶまでの体験を聞くことで、学生にもチャレンジ精神を持ってもらいたいと思った。



写真4 朴徹雄氏（筆者撮影）

## 2-5. 社会的企業家編：岡本工介氏

大阪府高槻市富田地域に基盤を置き、一般社団法人タウンスペース WAKWAK 事務局長および環境教育事務所 COT 主宰として活動されている岡本氏は、子ども食堂やさまざまな背景のある子どもたちの学習支援など、社会的課題の解決に取り組んでいる。

大阪府北部地震の際にも、地縁団体、住民ボランティア、フードバンクなどと協力しながら、行政の支援が届かない部分での被災者支援を行った。岡本氏が取り組む社会的包摂のまちづくり活動は、多くのメディアにも取り上げられている。

昨年、ボランティアや社会福祉活動への関心が高い学生も多い中、現場の話を聞く貴重な機会となると考えた。



写真5 岡本工介氏（筆者撮影）

## 2-6. フリーランス編：甲斐祐子氏

司会や朗読など、「声」を使い「話す」ことを仕事としている甲斐氏は、現在フリーランスの司会者として、披露宴や企業・行政イベントなどで活躍されている。

ご自身が主宰する朗読公演ユニット「本読みの時間」での企画イベントも多数開催されており、駅や山上で朗読したり、狂言とコラボレーションしたり、大人のための絵本朗読会をしたり、その内容は多彩である。

今回は対談のみならず朗読ミニワークショップも実施し、参加者には実際に小説を声に出して朗読する体験をしてもらった。「フリーランス」という働き方のリアルについて知ってもらうと同時に、「声に出す」「話す」という、コミュニケーションに直結するスキルを体得する機会を作ればと思った。



写真6 甲斐祐子氏（筆者撮影）

## 2-7. 金融業編：藤原明氏

りそな銀行勤務26年目の藤原氏は、現在5部署を兼務されており、これは非常に珍しいことだという。

今回は、その中で地域連携を担当する「リーナルビジネス部」の業務を中心に、取り組んできたプロジェクトを紹介していただくこととした。

銀行との接点が少ない学生にとっては、銀行は「ATM」や「会社にお金を貸すところ」くらいのイメージしか無いであろうと想像できる。しかし実は銀行という存在が地域社会とも関わりが大きく、多様なプロジェクトを動かしているのだということを知れば、これまでの金融業へのイメージが大きく変わるであろうと考えた。



写真7 藤原明氏（筆者撮影）

### Ⅲ. 講演録（抜粋）

ここからは、対談や質疑応答の記録から、ゲストの仕事の特徴的に表しているものや、参加者に響いた言葉などを中心にピックアップし、いくつかのカテゴリーに分けて紹介・掲載する。

#### 3-1. 今の仕事に出会うきっかけ

「なぜ今の仕事をするようになったのか」という問いは、ほぼ全ての回でゲストに投げかけている。

もちろんゲスト一人ひとりにそれぞれのきっかけは存在するが、会社や社長に直接働きかけた人、やりたかったことや興味があったことを仕事につなげた人など、自身の思いをベースにしっかりもっておられる方が多いと感じた。

“編集者という仕事を知ったきっかけが、本のあとがきに「この本の編集は誰々さんがやってくださいました」というようなものが書かれていたのを読んだことです。「編集者って何?」「編集者というものになれば、本づくりができるらしい」と気になって。そこからずっと、編集者とは何をしているのだろうかと知りたかったんです。それが学生時代、ミシマ社に手伝いに行ったきっかけだったりします。（中略）編集者というのに対する憧れみたいなものは、たぶん小学生の頃か中学生ぐらいに思っていたかなと思います。”（新居氏／ミシマ社）

“就職活動を一時しており、大企業も受けたりしていたのですが、本に関わる仕事がしたいなというのがまず一番にありました。どんな会社がいいのか考えている中で、今働いているミシマ社のことを知ったんです。社長が本を書いているのですが、それを

読んだらもう面白すぎて、メールでラブレターを送ったんです。”（新居氏／ミシマ社）

“（大学院で修士論文まで書いた後に）僕は洋服が好きだったので、本当ならばつくるサイドで、パタンナーとかデザイナーとかのほうに行きたかったのですが、やっぱりその専門学校に通っていないと、就職したとしても、企画とか、そういった方向止まりになってしまうので、一応内定はもらったのですが、何となくうだうだとしていて、結局タイミングを逃した感じですね。博士課程に行く準備をしつつ、ある京都の会社（一澤帆布工業）に連絡を取ったのです。そのときに考えていたのは、僕は博士課程まで進んで非常勤とかをしながら、趣味というか、二足のわらじみたいな感じでできたらなと思っていました。すごく甘いですね。”（田村氏／田村製作所）

“（一澤帆布工業に）履歴書を送るときに手紙を入れたのです。履歴書の備考欄で書ききれなかったので長い手紙を書きまして、何を書いたかという、将来的に独立したいという、すごく失礼な話です。そんな手紙を書いたにもかかわらず、採用をするかどうかの面接をしようかという電話を下さったこと自体が、懐が深いところだなと。そういうのもあって受けてみようかなと。”（田村氏／田村製作所）

“4年間ぐらい（日本で）サラリーマンをやって、日本人と結婚します。でも、出会ったのは韓国のソウルの語学研修で出会いました。それで、子どもが生まれたのをきっかけに会社を辞めました。（子どもが大きくなると支出が増えるので逆に辞められなくなると思って）

本当に自分が昔からやりたかったことがあったのです。いろんな人種の人が交わって交流ができるような、そういう場所をつくりたいなと思っていたので、ゲストハウスをつくることを決心します。

修行に入ったところが、品川にあるゲストハウスです。そこで半年間ぐらい住み込みで、昼も晩も働きます。ここも地域密着型でやっているところで、そこでいろいろ勉強させていただきました。”（朴氏／ゲストハウス萬家）

“僕は福祉業界ではありませんでした。元々は環境教育でのフリーランスで、日本各地を訪れてまし

た。アメリカ先住民のラコタ族の居留区というところにも長く行っており、その旅から得たビジョンをもとに、この仕事には2016年に就いたのですが、その時点でやっぱりこういうことをしたいなと思っていたのです。2年間、通信制の福祉大学に通って社会福祉士の資格を取りました。そして、独立して今の仕事に就きました。元々富田地区のまちづくりに関わることをやりたいという希望がありましたが、専門的な知識が不足していると感じていたため、社会福祉士を取得してから入ったという形です。”（岡本氏／タウンスペース WAKWAK）

“（マスコミの仕事をしていた頃に）ラジオの場合、聞いている人が分からないのですよね。インタビューに行ってラジオのなかでレポートをするという仕事をしていましたので、対面でやっているインタビューをラジオの電波に乗せて自分が見えない人たちに伝えているということに、当時すごく違和感がありました。今はまた少し考え方が変わってきています。

それが、イベント現場に行き始めたときには、こちらが言ったことに対してお客さん全員ではなくとも反応があります。たとえば、500人のお客さんであれば、半分ぐらいの人が聞いていないかもしれないですが、半分ぐらいは反応してくれる人がいます。3,000人に向かって、こんにちはずうと、3,000人のうちの1,000人ぐらいかもしれないですが、こんにちは、というすごい波が返ってくるということをやったときに、何となく、電波のなかに自分の仕事はないなと思いました。マスコミのお仕事をしているとき、いわゆるタレント事務所に所属していたのですが、少し違うかなと思ってフリーになりました。”（甲斐氏／司会者・朗読家）

“私は、業種で選んだのではないです。当時、銀行では大和銀行、それからアパレルではこの会社、それから損害保険会社でこの会社、3つ候補絞って、3つとも内定いただいて、どれにしようかと思って、最終的に1番いろんなことできそう、いろんな人に会えそうと思ったのが銀行だったのですが、そこだけは当たっていたのです。よかったのですが、入ったら違った。持っていたイメージと違うのです。人にはいっぱい会えるけど。でも結局、選択は間違えてなかったという気がしています。”（藤原氏／りそな総合研究所）

“もし中小企業に就職するのであれば、社長が面白いところを選ぶ。これに尽きるなと思っています。（中略）でも、僕らが面白いと思うようなところ（企業）は、就職情報を出していないことも多いです。ですから、「いろんなところにアンテナを立てて、もし面白いところに出会ったら『偶然知りました』『面接してください』というメールを送れ」というアドバイスをゼミ生にはしています。たぶん誰もやっていないと思いますけど。（中略）就職情報サイトなどを経由してエントリーするのではなくて、自分で調べたところで「好きだ」と思ったからという理由でメールを送ってみる。そういう行動ができるだけで十分と（ベンチャー企業をやっている友人が）言っています。”（神吉氏／成熟社会研究所）

“シェアラボにこれまで出てくださった人たちの多くが、就職先や自分の生業を自力で見つけたという人たちです。就職情報サイトには載らないような情報にアクセスできた人たちばかりをここにお招きしたわけですが、どうやって仕事を見つけたかを尋ねたら、「直接会いに行きました」「手紙を書きました」といったお話ばかりが出てきます。だから、就職情報サイトの利用はもちろん一つの手段だけど、それは決して全てではないのだということは、ここにお越しの学生の皆さんには本当にしっかり持って帰ってほしいと思います。”（神吉氏／成熟社会研究所）

### 3-2. 業界ならではのやり方、体験など

様々な分野の方々からお話を伺うと、その業界ならではの面白さや、考え方、感覚、やり方、ルールなどを知ることができる。

こういった情報は、就職情報サイトでは見えてこない部分でもあり、生の情報に触れることがいかに貴重で重要であるかを、改めて感じる。

“「本を書いてほしい人を選ぶ基準」については、まず、自分が読んで面白いと思うものを書いている方に頼むことが多いです。どうやって探すのかといえば、もう読むしかないです。本だけじゃなくて、新聞で論評を書いている方、雑誌、ネット、あらゆるところで面白いと思う人の文章を読む。読まないとはまらない仕事なので、常に本を読んでいますね。”（新居氏／ミシマ社）

“(質疑応答の中で)「機械化したらいいのではないか」という話があったのですが、これは僕らの感覚的な答えになります。食べ物は機械化するとおいしくなくなります。手作業でつくって、人の五感をフルに活用するからおいしいと思っていますので、たぶん機械化すると、そういった面もなくなってしまふのかなと思っています。”(武藤氏/パプアニューギニア海産)

“(新しい技術のアイデア、デザイン、技術といったアイデアはどういうところから出てくるのか、という問いに対して)デザインは無意識です。今までかっこいいなと思ってきたものが無意識の中にストックされていて、車のデザインとかが好きなんですけど、そういうのがきっかけとなって表出されるんだと思います。あと、動物とかがあると思います。例えばカブトムシの角とか、クワガタの牙とか顎とか、あれは自然に出てきていますけれども、よく考えたら、すごい形じゃないですか。自然本来の美しさというか。”(田村氏/田村製作所)

“金銭面では、あまり胸を張ってお勧めできる業界じゃないです。ただ、小さいところでできることはすごく面白く、幅広く、興奮することが多いと思いますので、それを味わいたいというのであれば、選択肢の1つに加えてもらってもいいのではないかなと思います。”(田村氏/田村製作所)

“ゲストの人がどうやって街になじむかというのは、例えば店に入ったり、買い物に行ったりしたときに、「どこから来たの?」「萬家から来ました」と言ったら、「ああ、朴さんのところね」と、そこでもうウエルカムしてくれるのです。僕が繋がったことで、僕のゲストもつながります。僕を信頼してもらうために頑張ったのです。でないと、僕が紹介するゲストも信頼してもらえないので。(誰をどんな店に紹介するかについては)ちゃんとスタッフが見て、この人は何が好きで、どういうところに行きたがるだろうというのを分析します。この人はこっちが似合いそうだとか、この人は山よりは海側とか。チェックインから決済が終わるまでにたくさんの会話ややり取りがあるのでわかります。そこがホテルと違うところですよ。”(朴氏/ゲストハウス萬家)

“(大阪府北部)地震の次の日に(地域を)回ったら、実は日々関わりのある方々、たとえば民生委員さんがすでに回っていたということがあったりして、直接顔が見えるので、この人が困っているということがすぐに見えて繋げることができた、ということがありました。(中略)だから日々顔が繋がっていることによって、いざというときに支援が繋がるということを今回の災害支援を通してまざまざと見せられたなと感じています。”(岡本氏/タウンスペース WAKWAK)

“私は今、フリーですが、単独でお受けするお仕事は、実はすごく少ないのです。今日は単独でお受けしていますから、追手門学院大学の経理さんと最終的にやり取りをすることになりますが、通常は間に1個挟みます。なぜかという、裁判になったときに負けるからです。”(甲斐氏/司会者・朗読家)

“名刺交換は15年間で1万は超えます。だいたい半年間で、新しく会う会社さん100社以上あります。個人の名刺なら、その3倍ぐらになります。(自分の)名刺は1年間で800枚は作ります。会い方が普通じゃないのです。単なる名刺交換に終わらない感じで、うねりを増すような繋がり方というか、それに感謝しています。”(藤原氏/りそな総合研究所)

### 3-3. 仕事を続けていくために

自分で選んだ仕事にも、不満や苦労は必ずある。思い通りにはいかない、逆境時だからこそ鍛えられたこと、しんどくても続けていきたいと思えた覚悟、そういったものをいくつか紹介したい。

“お給料ですが、大企業に比べると多いとは言えません。でもあるとき、食べていけないかなと思いました。実際ちょっと悩んだりもしたのですが、そんな食べていけないほどのお給料ではないし、高級ブランドのバッグとかは要らないし、いいかなと。最悪、もう野菜を自分で育てたらいいやと思ひまして、とりあえずやってみようと思ひ、入った感じ。”(新居氏/ミシマ社)

“技術に終わりはないですよ。だから、たぶんずっと続くと思います。今の仕事だって、何かやっているようには見えますが、全然自分では、まだま

だこれも足りない、あれも足りないというのは絶えずあるものだと思いますので。(中略) デザインとかパターンの方法というの、まだまだ奥深さというか、まだまだ足りていないところもありますね。僕も今の革の世界に入って、実地で本当に試行錯誤をしながらやっているという感じですからね。”(田村氏/田村製作所)

“この商店街は面白い。この近くにゲストハウスがあったら、さらに面白くなるのではないかなと思って、まさに自分が探していた場所だと。ここでゲストハウスをやろうと決めました。でも、知り合いが1人もいない。お金もない。物件も決まっていない。でも、取りあえずここでやると決めましたね。(中略) とりあえず僕は地元の人にならないと、と思って、商店街でバイトをして、どんどん顔を売りながら、祭りとかがあったらボランティアで手伝いに行ったりして、どんどんつながって、それで街の会議にも呼ばれるようになったのです。”(朴氏/ゲストハウス萬家)

“(クレームがあった時にマネージャーを通して) やんわり言われていたことが、フリーになったらダイレクトに来るか、もしくは、もう次がありません。(中略) 去年あったこの仕事が来ない、あれ、なぜ来ないんだろう、という方向になるのは怖いです。ですから、そうならないためにどうするかという神経の張り巡らせ方は、フリーになって最初の10年ぐらいで鍛えられました。”(甲斐氏/司会者・朗読家)

“(入社一日目でやめようと思っていた銀行を続けることにしたのは) 3ヶ月目のある日、雨の日の土曜日に車を走らせていたら、降りてきたんです。どんなことが降りてきたかという、銀行って絶対一生かかっても変わらないと思ったのです。それならば、これを自分のライフワークにしようと思ったんです。変わらないので、変えることをちょっといちびつたろうと。岩盤みたいところは絶対に変わらないので飽きない。これを自分の楽しみにしようと思ったのです。”(藤原氏/りそな総合研究所)

### 3-4. こだわり、大切にしていること

対談の中で語られる「仕事をしていく上で大切にしていること」「こだわっていること」などは、特に参

加者に響く言葉が多い。ゲストの芯の部分でもあり、それぞれの仕事の真髓が見える部分でもある。

“お互いに違う文化を持っているけれども、やはりお互いに尊重し合える社会をつくるためには、個人と個人の交流でしか実現できないかなと思って、そのときに若い人が交流して、理解し合えるような仕組みというか、そういう場所をつくりたいと思いました。(中略) ゲストハウスは20、30代の若い人がたくさん来てくれて、ただ泊まるだけではなくて、いろんな交流ができるのです。その交流も、そこでゲスト同士が交流するだけではなくて、実際に街に根ざしたゲストハウスがあれば、今度は外に出て、実際に日本に住んでいる、地元に住んでいる地元の日本人とも交流が生まれるのではないかなと思いました。それで地域密着ということにこだわりました。”(朴氏/ゲストハウス萬家)

“人と人は面と向かって話をしないと通じ合えないのではないかなと僕は思っていて、その中で仕事をするのなら、みんなと同じ作業をする。その中で、彼らが言っている内容について、やっとなんか考えられるステージに立つのかなと思っています。現場に入っていないリーダーというのは、現場の言っている意味を理解できないのだと思います。理解しているつもりではあるけれども、実際は理解していなくて、とんちんかんルールをつくってしまうのではないかなと。”(武藤氏/パプアニューギニア海産)

“僕らの会社が一応小さい会社ながらも踏み出して、効率も上がっている。それが広がれば、たぶん社会は変わります。

それこそ子育てが変わるし、地域の中では大人がどう子どもを守っていくか、いろんなことが変わっていくと思うので、それは全てが地域や社会のプラスになって、結果的に僕にも還元してくるのではないかなと思っています。

(有給が取りづらい会社の話を受けて) もうどんどん休んだほうが、そのほうが本当は仕事の充実。いつもつらい状況で会社に行っても、やはりトータルで見たら、全然プラスにはなっていないと思いますので、めりはりをきちんと付けていける会社は絶対プラスになります。”(武藤氏/パプアニューギニア海産)

“社会的起業が何かと言うと、社会課題の解決をミッションとしながらも一方で事務所経費や人件費が組織の中で回る仕組みを創ることです。子ども食堂や学習支援も子どもの貧困を解決するという社会課題の解決ですが、それを無償でやるということではなく、対価を得ながらも仕事としてちゃんと成り立たせるということです。ただ、その対価だけでは組織運営は難しいため、一方で収益事業を立ち上げその収益を社会課題の解決のための事業に循環させています。そうしてただ利潤を追求するだけではなく、企業として回るようにしていき、社会にも貢献するというのを最大のミッションにするわけです。”(岡本氏/タウンスペース WAKWAK)

“多くのNPOが結構苦戦しているのは、やはり財源をどう得ていくのかということところです。(中略)ボランティアでは長く続きません。これは仕事でもそうです。夢や思いだけでは限界があります。長期的にやっついこうと考えるのならボランティアに対して対価を支払うということをうちの法人では方針としています。”(岡本氏/タウンスペース WAKWAK)

“司会者の仕事は、進行をしているだけと思われることが多いのですが、進行するためにはイベント全部が見えていないといけません。1つのことがあって、この次にこれをやらなければいけないということの把握が必要です。(中略)何がクレームになるか分かりませんので、この状況のときに必要な物と人と時間を全て見た上で進行して行って、何時までに終わらせなきゃいけないということをやらなければいけません。”(甲斐氏/司会者・朗読家)

“自分が変えたくない部分はあるじゃないですか。そこだけは自分の基軸として、軸だけは変えてほしくないです。(自分の軸を発見したのは)銀行を変えたいという気持ちが降りてきたときです。(中略)今この歳になってもその時に獲得した軸はいいと思っているので、「自分がこれだ!と思ったこと」はずっと信じてほしい。”(藤原氏/りそな総合研究所)

### 3-5. 業界の課題やこれからへの思い

最後に紹介するのは、自身の仕事や業界へのこれからに対する思い、課題も含めた、将来につながるメッ

セージである。

“私が就職する前から「出版は斜陽産業」ということはずっと言われていました。どんどん本の売り上げが落ちて行って、どんどん本屋さんがなくなっていっている。今も言われているのですが、その中で逆にどうやっていくかみたいなのが大事なのかな。なくなるかもしれないという心配をするより、どうやってその中でやっていくかということの方がすごく大事なことなのではないかなと思います。”(新居氏/ミシマ社)

“皮漉き(革製品を薄く加工する技術)とかは特殊技術で職人さんの世界なので、やってくれるところがないと困ります。ですが、世代交代がうまくいっていないですね。だいたい僕らの職人の世界は、50代で若手、60代で中堅、本当に人がいないのです。(その理由としては)やりがいのあるなしというよりも、やはり生活が厳しい。”(田村氏/田村製作所)

“僕はあくまで、つくることが好きで、それをなりわいとしていたいという人がいれば、厳しい環境下ではなく、給料を払えるだけの仕事を取ってきて、その中で育てるといことはしたいとは思っています。やっぱりつくっている技術って、このまま放っておけば、どんどんなくなってくるので、それは何とかして継承していきたいとは思っています。”(田村氏/田村製作所)

“子どもの居場所づくりの話をしました。高齢者の部分がまだまだなので、来年度以降には高齢者の方を支える仕組みというのを作って、子どもから高齢者、障がいを持った人までのいろんな人達が地域のなかで生きていける町というものを、次の5年ぐらいのビジョンとして描き、今丁度動き出しているところです。”(岡本氏/タウンスペース WAKWAK)

“銀行のなかに、細谷さん(りそな銀行の経営危機後に新しくトップとなり、「新しい銀行像を創ろう」とメッセージを発信し「自ら考え、自ら行動する」という2つのジリツ「自律・自立」をベースにした現場改革を進めた)のイズムは残していきたいと思うのです。いろんな解釈があると思うのですが、私

なりの解釈はやっぱりそのまま伝え、残したいと思います。(中略)意識を持って、自分のやっていることと、いろいろなプロジェクトをきれいに結びつけるとか。目の前にある機会(チャンス)を意識するといろんなことがつながって、広がっていくので、いろんなことができるようになると思います。別に決まった形にこだわる必要はないと思います。皆さんも社会に出れば、自分の専門領域ができますと思いますが、全部自分でやる必要はなく、自分の専門外のところは誰かとうまく最適な答えを見つけることが重要だと思います。それができる人は、いいなと思います。”(藤原氏/りそな総合研究所)

#### IV. 参加者の反応

シェアラボ第4期、第5期における全ての回において、講演・対談の後に参加者のグループワークを実施し、感想や質疑について議論する時間を設けた。参加者の反応としては、「初めて知る働き方や業界の話を面白く聞き、興味関心を持った」あるいは「ゲスト講師の思いやこれまでの生き様に惹かれた、すごいと思った」というものが多かった。これは学生に限らず、一般・教職員の参加者も同様であった。

参加者アンケート(回答者の約7割が学生、2年分の平均回答率は83%)の「シェアラボに参加してご自身に変化や得たものがありましたか」という問いに対して、「たくさんあった」「あった」の合計が2年連続で9割を超えている。(図8、図9)

回答者の満足度も「満足」「やや満足」の合計が9割を超えており、こちらも2年連続で高い数値である。

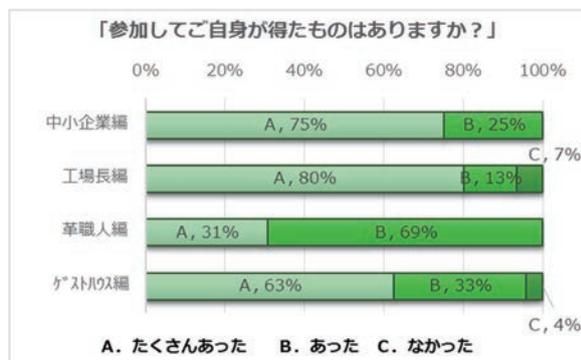


図8 参加者アンケートより(第4期)

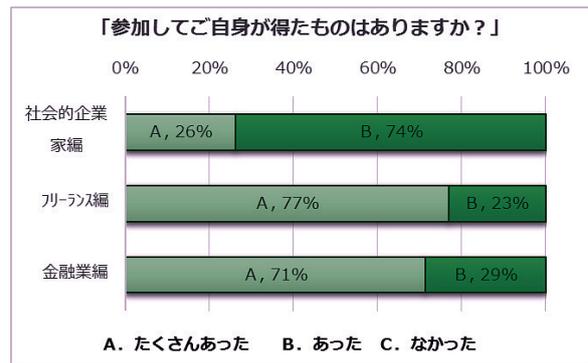


図9 参加者アンケートより(第5期)

#### V. おわりに

学生と話していると、「自分が何をしたいか分からない」「どうやって就職先を選べばいいか分からない」といった台詞を耳にすることが多々ある。

一方、就職したにも関わらず、「思っていたのとは違ったから」と1年で、もっとひどい時には数ヶ月以内に仕事を辞めてしまう若者も多い。

働き方、生き方に無数の選択肢がある現代社会では、自分の軸となるものを見つけて歩いていかなければ、あるいは見つけようと社会に関心を向けなければ、道に迷う以前に、前にすら進めなくなってしまう。

シェアラボに参加した学生の多くは、「こういう働き方があるのか」「こんな考え方もあるのか」と、新しい視点や可能性を見つけている。

ゲストの方々が多様な働き方、ライフストーリーを伝える「シェアラボ」という場は、学生の「軸探し」の一助になったのではないだろうか。



写真8 開催風景(2017.6.1 筆者撮影)



写真9 開催風景 (2018.7.2 筆者撮影)



写真10 開催風景 (2018.12.6 筆者撮影)

## 成熟社会研究所の事業

成熟社会研究所は、「すべては学生の成長のために」をミッションとして各種プロジェクトを遂行している。研究所として2018年度に取り組んだ主な事業（プロジェクト）は、以下の4つである。

学生のための 論理思考メソッドの開発	参加型研究会 シェアラボの開催	プロジェクト科目 1A2A 企業・地域との 講座企画プロジェクト	地域連携・交流事業 小豆島プロジェクト 豊後大野プロジェクト
-----------------------	--------------------	--	--------------------------------------

## 成熟社会研究所 活動報告

●：プロジェクト、打合せ等 ○：イベント・講座 ■□：プロジェクト科目関連

2018	4. 11	■プロジェクト 1A「企業・地域との講座企画プロジェクト」第1回講義（水曜5限/前期14回）
	6. 6-27	■プロジェクト 1A「企業・地域との講座企画プロジェクト」課外授業として国立民俗学博物館の視察
	4. 25	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ01
	5. 2	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ02
	5. 9	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ03
	5. 23	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ04
	7. 2	○シェアラボ5期 vol.1 社会的企業家編 ゲスト：岡本工介氏（タウンスペース WAKWAK 事務局長）
	7. 11	■プロジェクト 1A「企業・地域との講座企画プロジェクト」調理実習 GLOBAL COOKING 学生グループによる4ヶ国料理のメニュー提案および調理、実食（於：茨木市男女共生センターローズ WAM）
	7. 20-21	●小豆島プロジェクト・学生チームによる小豆島ヒアリング調査（株式会社メッツ研究所との共同研究）
	7. 25	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ05
	8. 10	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ06
	8. 20-23	●豊後大野プロジェクト・学生チームによる大分県豊後大野市のフィールドワーク調査
	9. 6-7	●小豆島プロジェクト・学生チームによる小豆島ヒアリング調査（補足調査）
	9. 19	■プロジェクト 2A「企業・地域との講座企画プロジェクト」第1回講義（水曜5限/後期15回）
	9. 20	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ07
	10. 4	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ08
	10. 14-15	●小豆島プロジェクト・学生チームによる小豆島ヒアリング調査（秋祭りの視察）
	10. 27-28	■プロジェクト 2A「企業・地域との講座企画プロジェクト」将軍山祭での「食品ロス」ポスターパネル展示
	10. 27	■将軍山祭での学生プレゼン大会にて小豆島プロジェクト・学生チームが発表、優勝
	11. 15	○シェアラボ5期 vol.2 フリーランス編 ゲスト：甲斐祐子氏（朗読家・司会者）
	11. 17	●豊後大野プロジェクト・学生チームによる「ものがたり観光行動学会・年次大会」での研究調査発表
	12. 6	○シェアラボ5期 vol.3 金融業編 ゲスト：藤原明氏（りそな総合研究所リーナルビジネス部長）
	12. 12	□プロジェクト 2A「企業・地域との講座企画プロジェクト」学生企画講座「食品ロスを減らすため私たちが今できること」講師：浅葉めぐみ氏（フードバンク関西理事長）会場：追手門学院大学 2311 教室
	12. 15	□プロジェクト 2A「企業・地域との講座企画プロジェクト」学生企画講座「親子で食べものはかせ！」親子対象、三色食品群について紙芝居およびクイズを実施 会場：安威公民館
	12. 17	□プロジェクト 2A「企業・地域との講座企画プロジェクト」学生企画講座「実演付き講座 魔法のスープ」協力：タカコナカムラ氏（一般社団法人ホールフード協会代表）会場：追手門学院大学 食堂
2019	1. 5	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ09
	1. 6	□プロジェクト 2A「企業・地域との講座企画プロジェクト」学生企画講座「サルベージパーティー」講師：吉野健一氏（野菜ソムリエ・料理研究家）会場：茨木市男女共生センターローズ WAM
	1. 18	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ10
	1. 23	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ11
	2. 1	●豊後大野プロジェクト・学生チームによる観光 PR 絵本『絵本パレット おもいでえのぐ』完成
	2. 13	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ12
	3. 8	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ13
	3. 18	●学生のための論理思考メソッド開発プロジェクト打合せ14
	3. 31	●成熟社会研究所 紀要3号の発行



プロジェクト 1A 調理実習風景  
「GLOBAL COOKING」  
2018.7.11



プロジェクト 2A 将軍山祭企画  
(食品ロスのポスターパネル展示)  
2018.10.27-28



プロジェクト 2A 学生企画講座①  
「食品ロスを減らすため  
私たちが今できること」  
2018.12.12



プロジェクト 2A 学生企画講座②  
「親子で食べものはかせ！」  
2018.12.15



プロジェクト 2A 学生企画講座③  
「実演付き講座 魔法のスープ」  
2018.12.17



プロジェクト 2A 学生企画講座④  
「サルベージパーティー」  
2019.1.6



シェアラボ第5期 vol.1  
社会的起業家編  
2018.7.2



シェアラボ第5期 vol.2  
フリーランス編  
2018.11.15



シェアラボ第5期 vol.3  
金融業編  
2018.12.6



小豆島プロジェクト  
(学生チームによるヒアリング)  
2018.7.20-21



小豆島プロジェクト  
(学生プレゼン大会優勝/将軍山祭)  
2018.10.27



豊後大野プロジェクト  
(学生チームによる学会発表)  
2018.11.17

### 執筆者紹介（掲載順）

神吉 直人（追手門学院大学 成熟社会研究所 副所長，経営学部准教授）  
佐藤友美子（追手門学院大学 成熟社会研究所 所長，地域創造学部教授）  
中川 啓子（追手門学院大学 成熟社会研究所 所員）  
村上 亨（追手門学院大学 成熟社会研究所 所員，経済学部教授）

### 追手門学院大学 成熟社会研究所 所員

所 長 佐藤友美子（追手門学院大学 地域創造学部教授）  
副所長 神吉 直人（追手門学院大学 経営学部准教授）  
所 員 村上 亨（追手門学院大学 経済学部教授）  
所 員 神谷 聡子  
所 員 中川 啓子

---

成熟社会研究所紀要 第3号

2019年3月30日 発行

発行所 追手門学院大学 成熟社会研究所  
〒567-8502 大阪府茨木市西安威2丁目1-15  
電話 (072) 665-5068

印刷所 友野印刷株式会社

---

